福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1313集

野方平原遺跡 2

― 野方平原遺跡第３次調査報告 ―

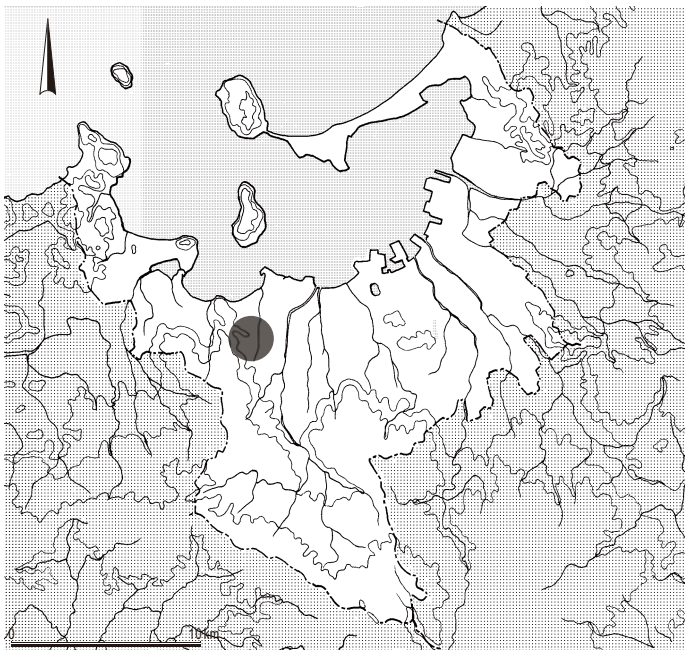
２０１７

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1313集

野方平原遺跡 2

― 野方平原遺跡第３次調査報告 ―



調査番号　1522
遺跡略号　NKH-3

２０１７

福岡市教育委員会

序

福岡市西郊に広がる早良平野に位置する野方地域は、西方の糸島平野と往来する古代の幹線道路が通っていたとされるなど、歴史的にみて重要な位置にある地域です。埋蔵文化財についても、史跡野方遺跡を始めとした多くの重要な遺跡が立地しています。

福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で西区野方六丁目地内において実施した、野方平原遺跡第 3 次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、関係各位の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力の結果であることをここに記し、心よりお礼申し上げます。また、本書が早良平野の歴史について理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成29 年3 月27 日

福岡市教育委員会
教育長　星 子 明 夫

はじめに

1　本書は、2015(平成 26) 年度、福岡市西区野方六丁目地内において福岡市教育委員会がおこなった、野方平原遺跡第 3 次調査の報告である。ただし、先の 2 回の調査は、隣接する別遺跡 (594 打ヶ浦遺跡) について行われた調査に対する呼称であることがわかり、野方平原遺跡についての調査は、今次調査が最初となる (福岡市埋蔵文化財調査報告書第 729 集『野方平原遺跡』2002 年)。

2　発掘調査は、福岡市教育委員会が文化財保護法第 93 条に基づく届け出を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、事業者の委託により、記録保存を目的として、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 (当時、平成 28 年度埋蔵文化財審査課を併せ埋蔵文化財課、以下同じ) が実施したものである。発掘調査は、土地所有者および株式会社ネッツを始めとした関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。

3　発掘調査及び報告は、杉山富雄・山本晃平が担当した。

4　出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡例

1　位置の記録は、国土座標 (世界測地系) に依った。

2　図中に用いる方位は国土座標の座標北である。

3　報告中の遺構・遺物番号は、それぞれ登録番号を用い、調査現場での記録から整理、収蔵まで一貫して管理し、台帳・実測図・日誌等調査記録に記載した情報と極力関連づけておくことに努めた。記述中必要に応じて、遺構には「M」、遺物には「R」を付した登録番号を用いた。

4　文中、遺物の分量は、秤量したものではなく、調査に用いた容器 (ポリ袋) を単位とした目分量による記述である。そのおおよその分量は以下のようになる。小ポリ袋：0.5 ℓ 以下、中ポリ袋：小ポリ袋以上、1.5 ℓ 程度まで、大ポリ袋：中ポリ袋以上 4 ℓ 程度まで。以上は遺物用コンテナを単位とするが、今回調査ではそのような分量で遺物を出土した遺構、部位はなかった。

遺跡調査番号	１５２２			調査略号	ＮＫＨ-３
調査地籍	福岡市博西区野方六丁目577番3,578番3,580番1			分布地図番号	１０４
事業地面積	1,610 ㎡	調査対象面積	330 ㎡	調査面積	361 ㎡
調査期間	2015(平成 25)年 9 月 2 日 ～ 2015(平成 25) 年 10 月 20 日				

本文目次

序 …… i
1 野方平原3 次調査の概要 …… 3
(1) 発掘調査の経緯 …… 3
(2) 野方平原3 次地点の立地と周辺の調査 …… 3
(3) 発掘調査の経過と調査成果の概要 …… 3
2 野方平原3 次調査の記録 …… 5
(1) 発掘調査の概要 …… 5

調査地の景観 …… 5
発掘調査の経過 …… 5
記録の方法 …… 7
(2) 野方平原3次調査出土の遺構と遺物 …… 8
出土遺構と遺物の概要 …… 7
段落ち1・凹地2 …… 8
掘立柱建物12 …… 10
掘立柱建物233 …… 15
掘立柱建物247 …… 16
掘立柱建物264 …… 19
柱列266 …… 20
遺構237 …… 21
土壙4 …… 21
土壙96 …… 23
土壙106 …… 24
土壙138 …… 24
小穴5 …… 24
小穴42 …… 24
出土遺物 …… 25
3 おわりに …… 31

図目次

図1 野方平原3次調査区位置図〔1：2000〕…… iv
図2 野方平原3次調査地位置図〔1：50,000〕…… 1
図3 調査区全景（上方が北）…… 2
図4 野方平原3次調査区全体図〔1：100〕… 3
図5 調査地全景（上方が南）…… 5
図6 調査区全景（北から）…… 6
図7 調査区南半部（西から）…… 6
図8 段落ち1・凹地2（1：80）…… 8
図9 段落ち1・凹地2出土遺物（1：2,1：3） 9
図10 段落ち1（南から）…… 10
図11 掘立柱建物12（1：50）…… 11
図12 建物12柱穴出土遺物（1：3）…… 11
図13 掘立柱建物12柱穴土層（1：40）…… 12
図14 掘立柱建物12（北から）…… 12
図15 掘立柱建物12（東から）…… 13
図16 掘立柱建物233（北から）…… 14
図17 掘立柱建物233（1：50）…… 14
図18 掘立柱建物233柱穴土層（1：40）…… 15
図19 掘立柱建物247（1：50）…… 16
図20 掘立柱建物247（北から）…… 17
図21 掘立柱建物247柱穴土層（1：40）…… 17
図22 掘立柱建物264（1：50）…… 18
図23 掘立柱建物264柱穴土層（1：40）…… 19
図24 柱列266（1：50）…… 20
図25 遺構237（1：50）…… 21
図26 遺構237（北から）…… 21
図27 土壙4（1：40）…… 22
図28 土壙4出土遺物（1：1,1：3）…… 22
図29 土壙4（北から）…… 22
図30 土壙96（1：40）…… 23
図31 土壙96（東から）…… 23
図32 土壙106（1：40）…… 23
図33 土壙106（北から）…… 24
図34 土壙138（1：40）…… 24
図35 小穴5（1：20）…… 24
図36 小穴5出土遺物（1：3）…… 25
図37 小穴5（北から）…… 25
図38 小穴42（1：20）…… 25
図39 小穴42（北から）…… 26
図40 出土遺物（1） 1:3 …… 27
図41 出土遺物（2） 1:2,1:3 …… 28
図42 出土遺物（3） 1:3 …… 29
図43 出土遺物（4） 1:1,1:2 …… 29
図44 出土遺物（5） …… 30

表目次

表1 遺構出土遺物構成（1）…… 32
表2 遺構出土遺物構成（2）…… 33
表3 遺構出土遺物構成（3）…… 34
表4 報告遺物観察表（1）…… 35
表5 報告遺物観察表（2）…… 36
表6 報告遺物観察表（3）…… 37
表7 報告遺物観察表（4）…… 38
表8 報告遺物索引 …… 38

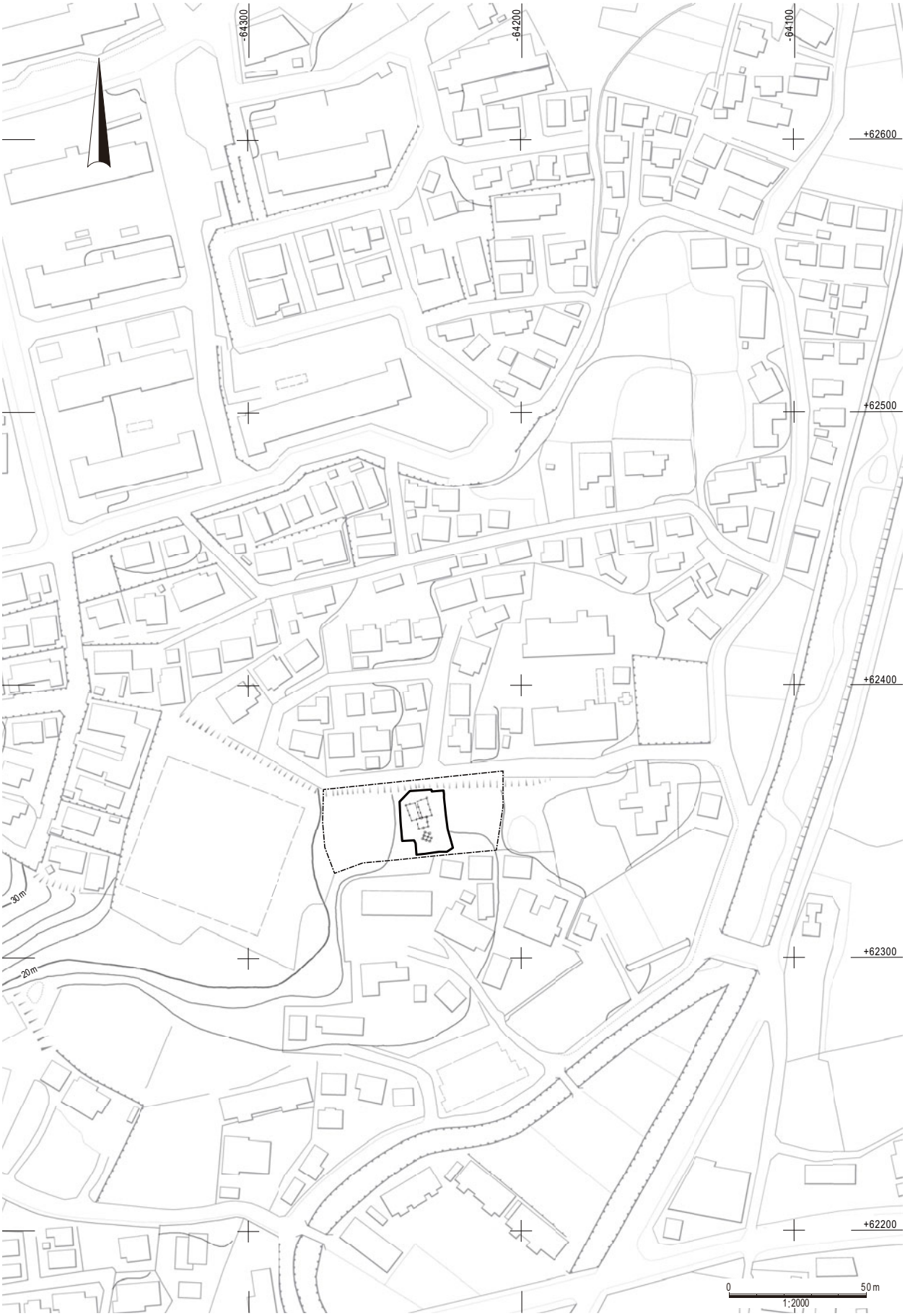


図 1　野方平原 3 次調査区位置図 (1：2000)

1 野方平原 3 次調査の概要

(1) 発掘調査の経緯

埋蔵文化財事前審査　2015(平成25)年3月22日付けで福岡市西区野方六丁目 577 番 3 ほか地内における宅地造成計画に伴い、当該地の埋蔵文化財の有無について福岡市教育委員会宛て照会があった。当該地は野方平原遺跡内に所在することから、4 月 22 日文化財部埋蔵文化財審査課 (当時) が確認調査を実施した。その結果、対象地内に埋蔵文化財が遺存することを確認した。これを受けて、設計変更等による埋蔵文化財の現状での保存を検討した。しかし、掘削範囲が埋蔵文化財への影響を避けることができないものであることが判明したことから、事業者の理解と協力を得て、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

図 2　野方平原 3 次調査地位置図 (1：50,000)

発掘調査　発掘調査は土地所有者からの委託を受け、野方平原遺跡第 3 次調査 (以下、野方平原 3 次調査とする) として、埋蔵文化財調査課 (当時) が担当することとなった。調査対象範囲は、先の確認調査により遺構が分布するとされた範囲とし、2015(平成 27) 年 9 月 2 日現場作業に着手した。結果として、遺構の分布にしたがって一部を拡張したことから、361㎡について調査を行い、10 月 20 日発掘作業を完了した。調査による出土遺物は、土器・石器類の他金属製品を含め、コンテナ 3 箱分の分量となった。

(2) 野方平原 3 次地点の立地と周辺の調査

遺跡の立地　野方平原遺跡は、早良平野の西縁部、脊振山地から分岐して長垂へ至る山地の東面山麓、野方地域に位置する。山地は、野方から今宿平野まで北西に伸びる断層に沿い、その両端から奥深く進入した谷により切断されたような地形となっている。この地形は、古くから幹線道路として利用が行われており、古代官道、駅の立地が想定されている。現状では見る影も無いが、旧地形図をみると、その中央部から、山地地形が放射状に広がる複雑な樹枝状の谷により開析され、丘陵が放射状に広がっていたことが判る。

野方平原遺跡は、そのような地形の末端部にあたり、早良平野に向かい東方に突出した、広い中位段丘上に立地している。調査地周辺は、旧来の集落の範囲にあり、比較的原状を保っている。雑木林となっていた調査地は、段状の改変を受けながらも東へ向かい緩く傾斜する地形をなお留めている。

周辺の調査　今次調査は、野方平原遺跡 3 次調査とするが、本遺跡における最初の調査である。前 2 度の調査は、南に隣接する打ガ浦遺跡について実施したものである。2 地点は隣接し、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構が出土した。広い谷を隔てた南方の中位段丘面上に立地する野方中原遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての大規模な集落が広がっていたことが確認された。同様な集落が、野方久保遺跡に及ぶことが考えられる (1 次・4 次調査)。また、野方久保遺跡では弥生時代前期末から中期にわたる甕棺墓地の分布が確認されている (2 次)。野方平原遺跡の北に並ぶ丘陵端部には、中位段丘が分布し、コノリ遺跡群では、大規模開発による破壊が著しいものの、弥生時代中期後半に始まり、後期から古墳時代初頭を中心とした時期の集落が立地しているほかに、古墳時代後期集落、奈良時代の遺物が顕著に見られ、製鉄との関連も示唆されている。

図 3　調査区全景 (上方が北)

図 4　野方平原 3 次調査区全体図 (1：100)

2 野方平原 3 次調査の記録

(1) 発掘調査の概要

調査地の景観

野方平原 3 次調査地は、前章立地の項で触れたように、東に向かい舌状に伸びる中位段丘上に立地している。1969 年作成の地形図をみると、北と南にそれぞれ谷を隔てて、同様な地形がそれぞれ北東方向、東方向に伸びている。このうち、今回調査地が位置する中央と北の段丘部が野方平原遺跡の範囲となる。南の段丘部は周辺の低地も併せて打ガ浦遺跡の範囲となっている。

調査地の現状は、西から南へ下る傾斜地となっている。1969 年図をみると、更に一段上がって丘陵末端との接続位置に、果樹園として利用されている広い平坦地があり、この位置までが段丘面であったと見える。その位置まで、中央段丘北側の谷が延び、南西方向に回り込んでいる。

調査は、幅広い段丘面の北縁肩部に接し、段丘面の北半部を占める位置にある。南半部及び東側は、平原集落として宅地に造成、利用されてきた。調査地は、西辺部で標高 19.5 m、東辺部へ比高 4.5 m程下る緩斜面である。更に地内の地形は、3 段の緩斜面に分けることができる。各斜面間には 1 m 程度の段差がある。西の上段斜面から中央の中段斜面に向かう段差は明瞭である。中段から下段に向かっては急斜な傾斜地となっている。

発掘調査の経過

調査地について、確認調査の結果、遺構が上記中段の緩斜面の東辺部に寄って分布するものと判断し、中段緩斜面の東縁部、下段緩斜面に向かう急傾斜地の肩部から西へ調査区を設定した。

図 5　調査地全景 (上方が南)

図 6　調査区全景 (北から)

図 7　調査区南半部 (西から)

表土鋤取りは重機を用い、調査区東辺部から着手した。調査面は地山段丘礫層面とした。調査区北辺と東辺については、降雨による汚濁水流出を防ぐため、外周に土手を残した。表土鋤取りを西へ進め、遺構の分布の途切れる位置まで表土を鋤取った。

調査面では、調査区東辺部に沿ってＬ字状に分布する包含層を検出した他は、大小の柱穴、土壙が調査区中央部を中心に分布していることがわかった。多くの柱穴は、地山土を用いて埋めており、しばしば柱痕跡のみを確認することがあった。このため、日を置いて乾燥状態の変化した時点で、改めて確認作業を行うなどして柱穴の検出に努めた。

記録の方法

調査にあたり、近隣の既知点に依り、国土座標系に沿った調査区画を設定し、平面図の記録、遺物出土位置の記録に用いた。各区画について、座標系の 1㎞区画を 10 等分して 100 m区を設定、更にそれを 10 等分して 10 m区とし、更に 5 等分して 2 m区とした。

各区画は座標南東隅を基準として、Y 軸 (西) 方向の各区画の順番号を上の桁、X 軸 (北) 方向の順番号を下の桁に組み合わせて 2 桁で表記した。

今回調査では、調査地を含む 1㎞区は南東隅基準点の座標が X=62,000、Y= － 64,000 となる。100 m区は同様に区内の西へ 3 列目の北へ 4 段目にあることから、34 区となる。記録上は、調査区画を示す「G」に続けて「34 －」以下 10 m区 (2 桁)･2 m区 (2 桁) を続けて表記し、出土区画を記録した (例 G34-4631、南東隅基準点は X=62,350、Y=-64,224)。

現場での遺物取り上げに際して、取り上げた遺物の単位に対して遺物番号を付し、(現場) 台帳に登録した。整理に際しては、その番号を登録遺物番号として利用し、さらに個体として抽出したもの、接合のため抽出したものについては新規に採番し、これも登録遺物番号に加え、抽出元番号の付加により遺物出土情報の整合性を保つこととしたうえで、遺物収蔵台帳のための原簿とした (整理台帳)。今回調査では、現場で取り上げた遺物 346 件、整理の過程で追加登録したものを加えると 558 件となる。

遺構は、内容に関わらず連番で登録した。小穴は遺物を出土したもののみを登録した。柱穴等、遺構の構成要素となる遺構についてもこの系列で登録し、両者の関係を台帳に記録した。登録遺構は、撹乱等も含め 252 件、更に他遺構を構成要素とする遺構 6 基となる。

遺物への注記、図面等記録類の記述に際しては、先述したように、必要に応じて遺構には「M」、遺物には「R」を付し、番号の意味を示した。

(2) 野方平原 3 次調査出土の遺構と遺物

出土遺構と遺物の概要

野方平原 3 次調査では、遺構分布範囲について調査を行った。調査区は東へ下る緩い緩斜面であり、東辺部では一段下る急斜面が認められた。調査区は西辺部中央で標高 17.3 m、東辺部中央で標高 16.2 mとなり、東西間の比高は約 1 m程となる。遺構は、調査区の周縁部では希薄となる。西方へは特に顕著であり、調査区をもって遺構分布の西限ととらえた。上記した総数のうち、柱痕跡を認めたもの、掘立柱建物等の構成要素となるものを柱穴とし、それ以外の小形の掘方をもつ遺構を小穴と記録した。柱穴 72 基、小穴 130 基を記録したが、作業の進行上、遺物出土のなかったものは台帳に登載できなかった。柱穴から掘立柱建物 4 棟を復原できた。このうち、3 棟は調査区北半部に重複・隣接して位置し、1 基は離れて南半部に位置する。土壙は 12 基を登録した、土器を投棄するもの、焼土壙とするものがある。また、段落ちとそれを埋める包含層を調査した。竪穴住居の一部かと思われる遺構も検出した。

遺構から、主として弥生時代後期、奈良・平安時代の土器が出土した。大半の土器は、細片資料として遺存していたが、土壙中に投棄されたような出土状態を示すもの、小穴 (柱穴) 中に埋置されたような出土状態を示すものを複数確認した。出土遺物には少数であるが、陶磁器が混じる。

以上のほか、金銅製品、鉄製品、玉類が極少量出土した。石器類には縄文時代の石鏃のほか、砥石、敲石等の器具類も出土した。遺物の出土状況は、各遺構覆土に少量ずつ含まれることが殆どで、先述したように総量としてはコンテナ３程の出土であった。

以下、段落ち・凹地、掘立柱建物、柱列、竪穴住居状の遺構、土壙、小穴の順に遺構と出土遺物を、次いで採集・表土出土遺物、土製品・石器類を報告する。本文中に掲載しない遺構も含め、遺物構成を表１～３に記す。報告遺物の詳細は表４～７に記す。

段落ち1・凹地2 (図8・10)

調査区北半部の南辺斜面に掛かる場所、G34-46 区に位置する。表土鋤取り時、調査区北壁から南方向に狭くなりながら帯状に広がる包含層として検出した (段落ち１として調査)。包含層はその南端で折れて西へ向かう部分 (凹地 2) と、北辺付近でやはり北へ広がる部分 (不整な落ち 139) とがある。包含層の広がりは北壁から南へ 9.7 m、壁際が最も広く幅 2.5 mの範囲にある。包含層は、暗褐色粘質土 (7.5YR 3/4) が、最も深い部分で 0.1 m程度遺存していた。包含層を除去すると、その分布の西縁に沿って部分的に段落ちが検出され、包含層はそれを埋める状態で堆積する。また、包含層掘りあげ時、土壙 (M106 は後述)、小穴を検出したが、包含層との前後関係は不明である。段落ちは北、南方向へは伸びず、包含層は調査区の勾配の変化する肩部に残るような状態を示す。西

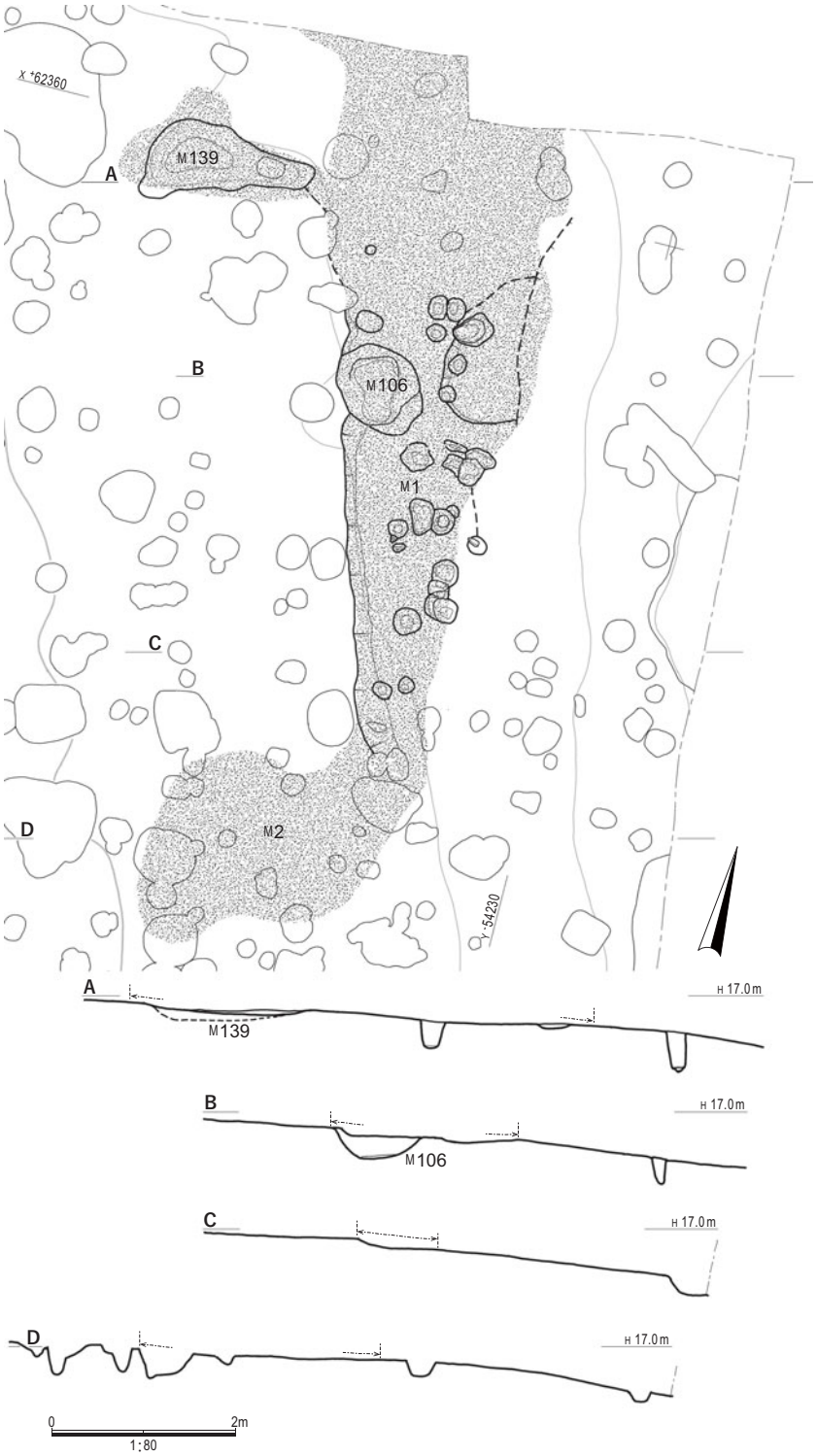


図８　段落ち１・凹地２(1：80)

へ広がる部分については、南端部のそれはごく浅い凹地 (凹地 2) に残っていたものと観察された。北端部の広がりは、不整な土壙状の落ち込みとなっている (不整な落ち 139)。

段落ち1・凹地2出土遺物 (図 9, 表 4)　　それぞれの各部から、遺物が散漫に出土した。総量で大ポリ袋程の分量となった。大半は細片化した土器である。平安時代までの遺物が含まれている。

各部の出土遺物構成は以下のようなものとなる。

〔段落ち 1〕土師器 (皿)、須恵器 (蓋、甕)、弥生土器。陶器 (壷)。平瓦、鉄釘、鉄滓。

〔凹地 2〕土師器、弥生土器、須恵器、陶器、鉄滓。

〔不整な落ち 139〕弥生土器、土師器 (坏ほか)、須恵器。

図 9 に段落ち 1、凹地 2 出土遺物を示す。

段落ち 1 出土遺物　　土師器皿、456 は須恵器蓋、447 は甕である。478 は陶器口縁部で壷か。457 は平瓦細片である。土師質で著しく破損している。401 は、鉄製釘断片か。470 は、石包丁である。

凹地2出土遺物　　479 は土師器甑である。

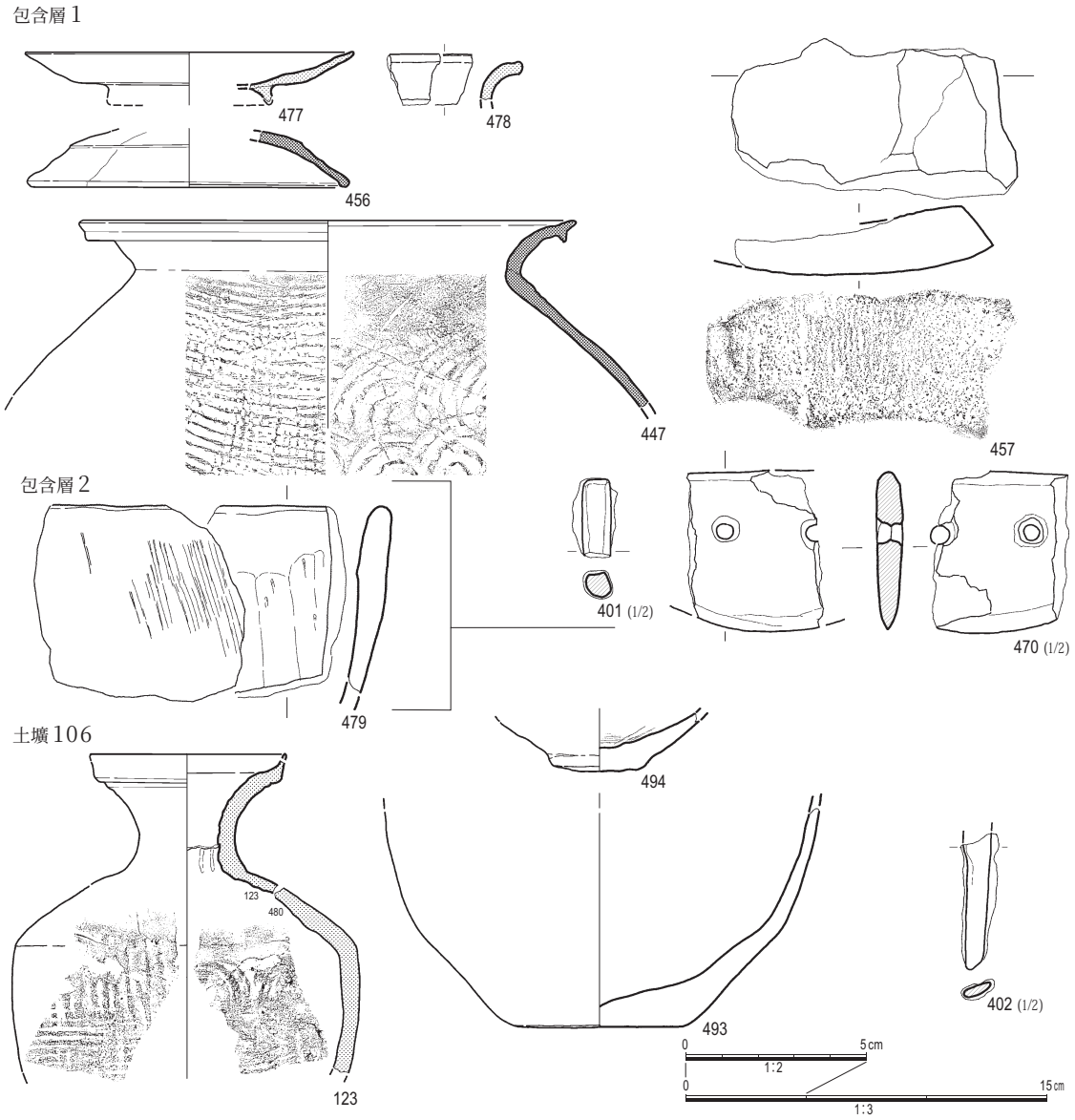


図 9　段落ち 1・凹地 2 出土遺物 (1：2,1：3)

図10　段落ち１(南から)

掘立柱建物12（図 11・13 ～ 15)

調査区中央、G34-45・46 区に位置する２間×２間の掘立柱建物である。平面形が歪な方形状となる。総柱建物の可能性を考えたが、中央に土壙４が位置し、柱穴は確認できなかった。北側の柱穴が掘立柱建物 233・264 南妻側の柱穴と重複し、いずれの建物より古い。建物の軸は、北から 16°西へ振れた方向となる。建物を構成する柱穴は、平面形が不整な円形状となるものが多いが、隅円長方形状で、より大形のものが混じる。柱穴の平面規模は径 0.6 m当りに集中する。最大のもので、隅円長方形状の柱穴 72 の長さ 0.8 m、幅 0.6 m、最小のもので柱穴 53 の径 0.5 m弱を測るものものまでがある。柱穴の底面高度をみると、全体として西側より東側が僅かに低い。北西隅の柱穴 61 の柱穴底面は標高 16.7 m辺りにあるが、南東隅の柱穴 39 は最も深く、底面が標高 16.5 mの位置にある。

建物規模は、北側 (柱穴 61 －柱穴 77、以下同じ) で 3.87 m、南側 (13 － 39) は他辺のそれよりも狭く 3.53 m、西側 (61 － 13) は 3.80 m、東側 (77 － 39) は 3.75 mとなる。また、各柱間隔については、柱痕跡若しくは柱圧痕の残るものについてはその中心点間の距離、それ以外は柱穴中心を基準としたときの距離を図 11 中に示す。

掘立柱建物 12柱穴出土遺物（図 12・44, 表 4)　　建物を構成する各柱穴から少量ずつ遺物が出土した。いずれからの遺物についても土器は細片化し、器表は著しく荒れていることから、大半の資料について詳細不明。

柱穴 13　堀方、柱痕跡覆土から各少量の土器出土。いずれも詳細不明、弥生土器か。

柱穴 39　堀方：土師器、弥生土器 (甕ほか)。 柱痕跡覆土：土器 (弥生土器か)、剥片。

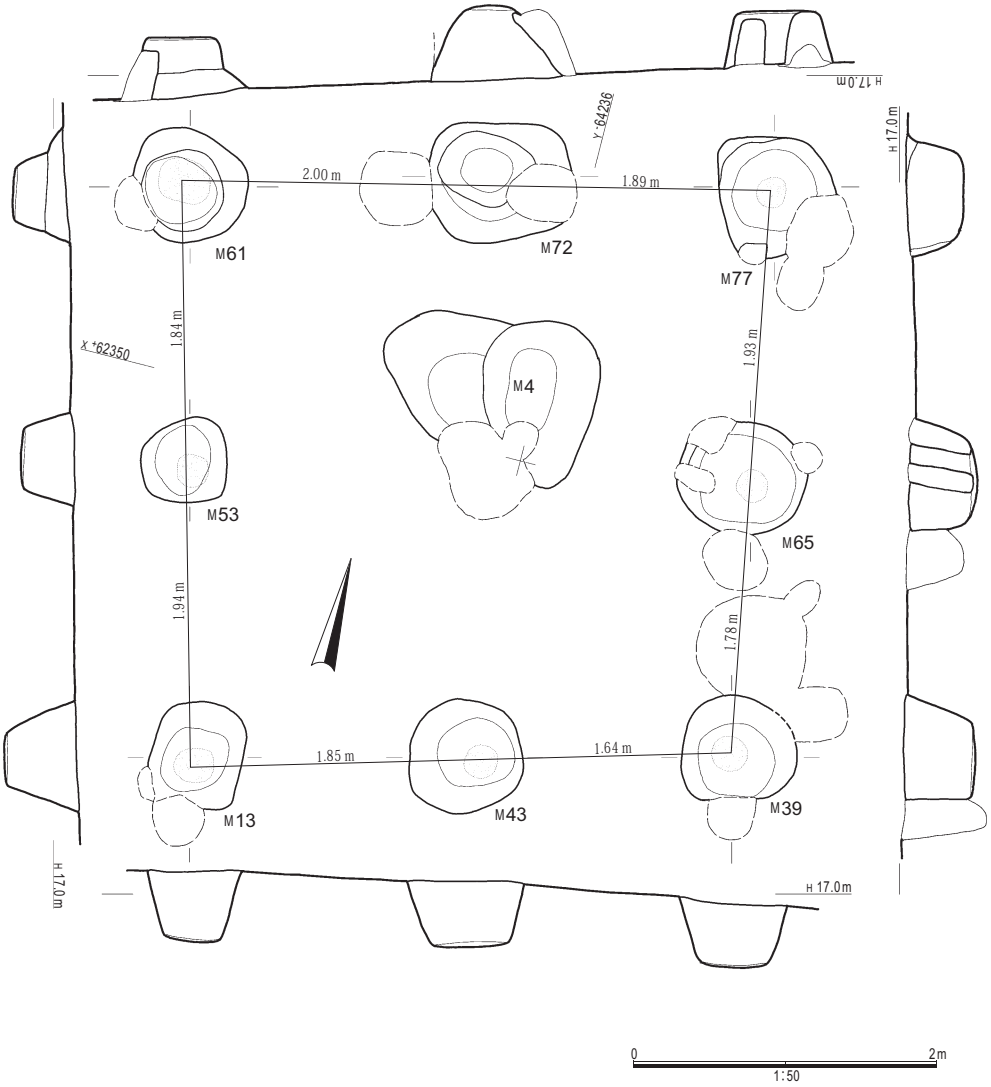


図11　掘立柱建物 12 (1：50)

柱穴 43　堀方：土師器、弥生土器 (壷、器台ほか)。 柱痕跡：土師器、弥生土器、石鍋。

柱穴 53　堀方：土器 (詳細不明)。 柱痕跡：弥生土器 (甕) ほか土器。

柱穴 61　土器 (詳細不明)。

柱穴 65　堀方：土師器、弥生土器。 柱痕跡：土器 (詳細不明)。

柱穴 72　堀方：土器 (弥生土器・土師器か、詳細不明)。 柱痕跡：土器 (詳細不明)。 埋土上部から、鉄滓。

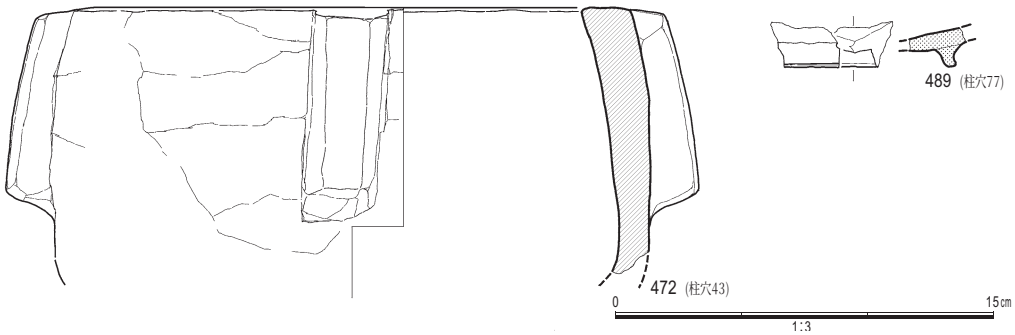
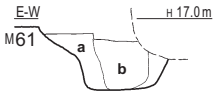
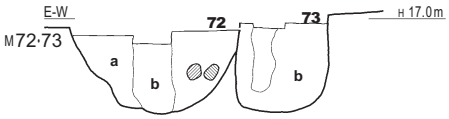


図12　建物 12 柱穴出土遺物 (1:3)

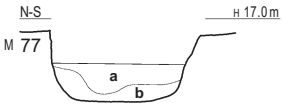


a 掘方 地山土団粒。赤褐色(2.5YR 4/8)・褐色(7.5YR 4/6)粘質土(砂混じりシルト)。
b 柱痕跡 粘質土(砂質シルト～細砂)、にぶい黄褐色。

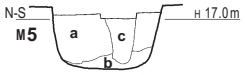


M72
a 掘方 団粒状の地山土。明褐色(7.5YR 5/6) 土ほか混じり。粗砂が混じる。間隙はにぶい黄褐、この位置では褐色・黄褐色の斑状を呈す粘土質シルト。
b 柱痕跡 砂質シルト。

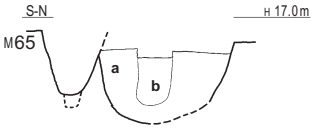
M73
a 掘方 ほとんどが地山土。他の性状は M72 の掘方覆土に同じ。
b 柱痕跡 砂質シルト、灰色味あり。



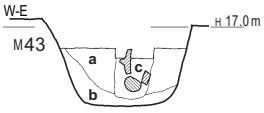
a 掘方上部 団粒状の地山土。褐色 (5YR 4/3) 土が主。粘質土で、土壌化した地山表土層か。
b 掘方下部 団粒状の地山土。明褐色 (7.5YR) 土が主。
※ 断面では、柱痕跡不明瞭。



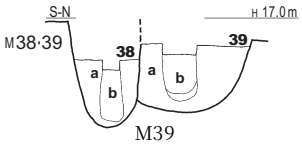
a 掘方 団粒状の褐色 (5YR 4/3) 粘質の地山土を主とする
b 掘方 団粒状の明褐色 (7.5YR) 地山土が主。
c 柱痕跡 団粒状の褐色粘質土で地山土混じり。



a 掘方 大部分が地山土塊 (ア)。間隙は粘質土が埋める。上部はイが半ばを占め、下部はアが大半を占めるように漸移する。
ア 粘質土 褐色 (7.5YR 4/6) 粗砂混じりシルト。
イ 粘質土 褐色 (7.5YR 4/3) シルト、やや灰色味。
b 柱痕跡 褐色 (7.5YR 4/3) 粘質土で埋まる。間隙に白色細砂層を挟む。



a 掘方上部 団粒状の地山土。間隙を褐色土が埋める。白色細砂が滲みる込む。礫が投入されている。
b 掘方下部 地山土団粒のみから成る。
c 柱痕跡 褐色土。地山土少量が混じる。礫・石鍋片等が落ち込んだような状態で出土。



M38
a 掘方 褐色土 (灰色味の粘質土) と団粒状の地山土 (褐色粘質土) が混じる。前者がやや多い。
b 柱痕跡 粘質土 (シルト) 灰黄褐色 (10YR 4/2) 。顕著な団粒状。

M39
a 掘方 団粒状の地山土 (褐色粘質土) で埋める。間隙を褐色土 (灰色味の粘質土) が埋める。
b 柱痕跡 粘質土 (シルト) 、灰黄褐色 (10YR 4/2) で、地山土が混じる。下部は暗赤褐色 (5YR 3/4) 粘質土 (地山土か)。

0 1m
1:40

図13 掘立柱建物 12 柱穴土層 (1：40)

図14 掘立柱建物 12 (北から)

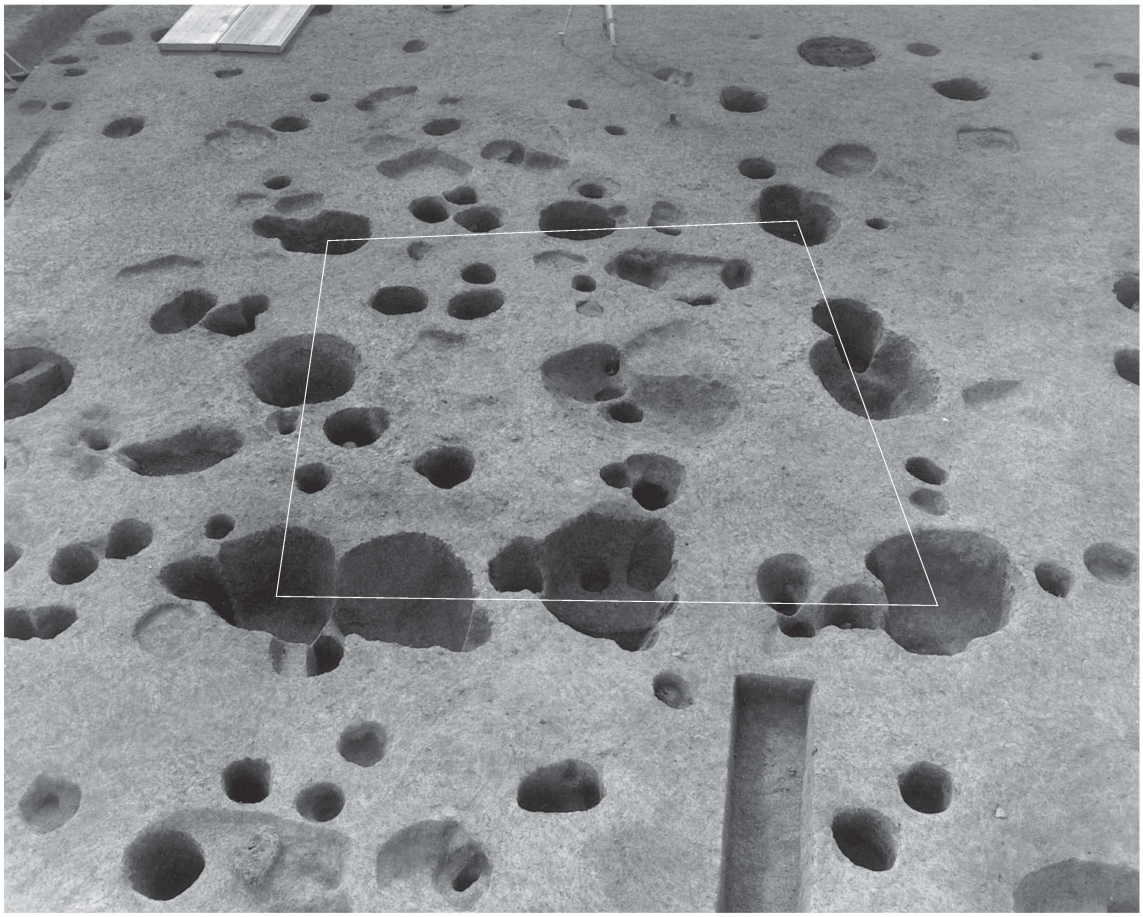


図15　掘立柱建物 12 (東から)

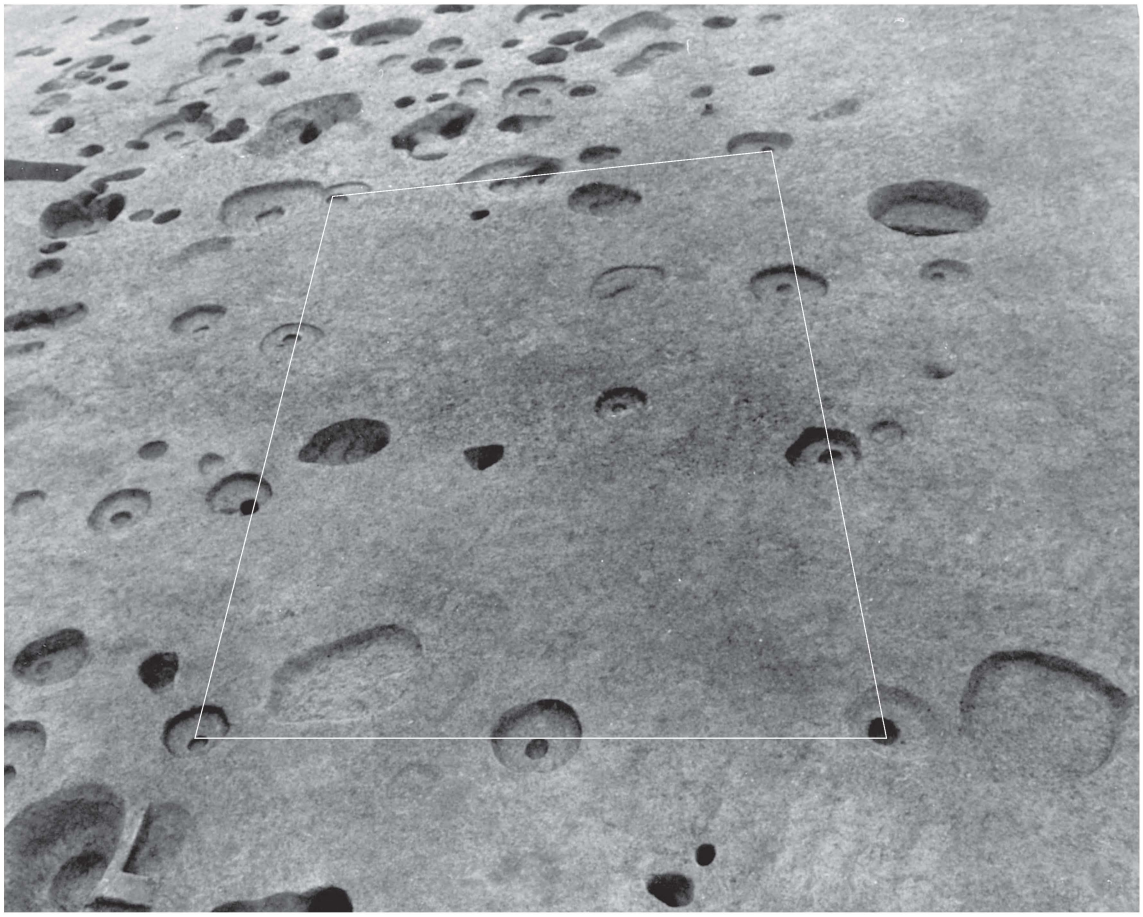


図17　掘立柱建物 233 (北から)

柱穴 77　土師器、須恵器 (坏)、弥生土器。

図 12 に実測図を示す。石鍋 472 は柱穴 43 柱痕跡覆土から、礫とともに出土した。縦型の把手が付き、その下から屈曲して底部となるように観察される。須恵器 489 は柱穴 77 掘方出土である。底

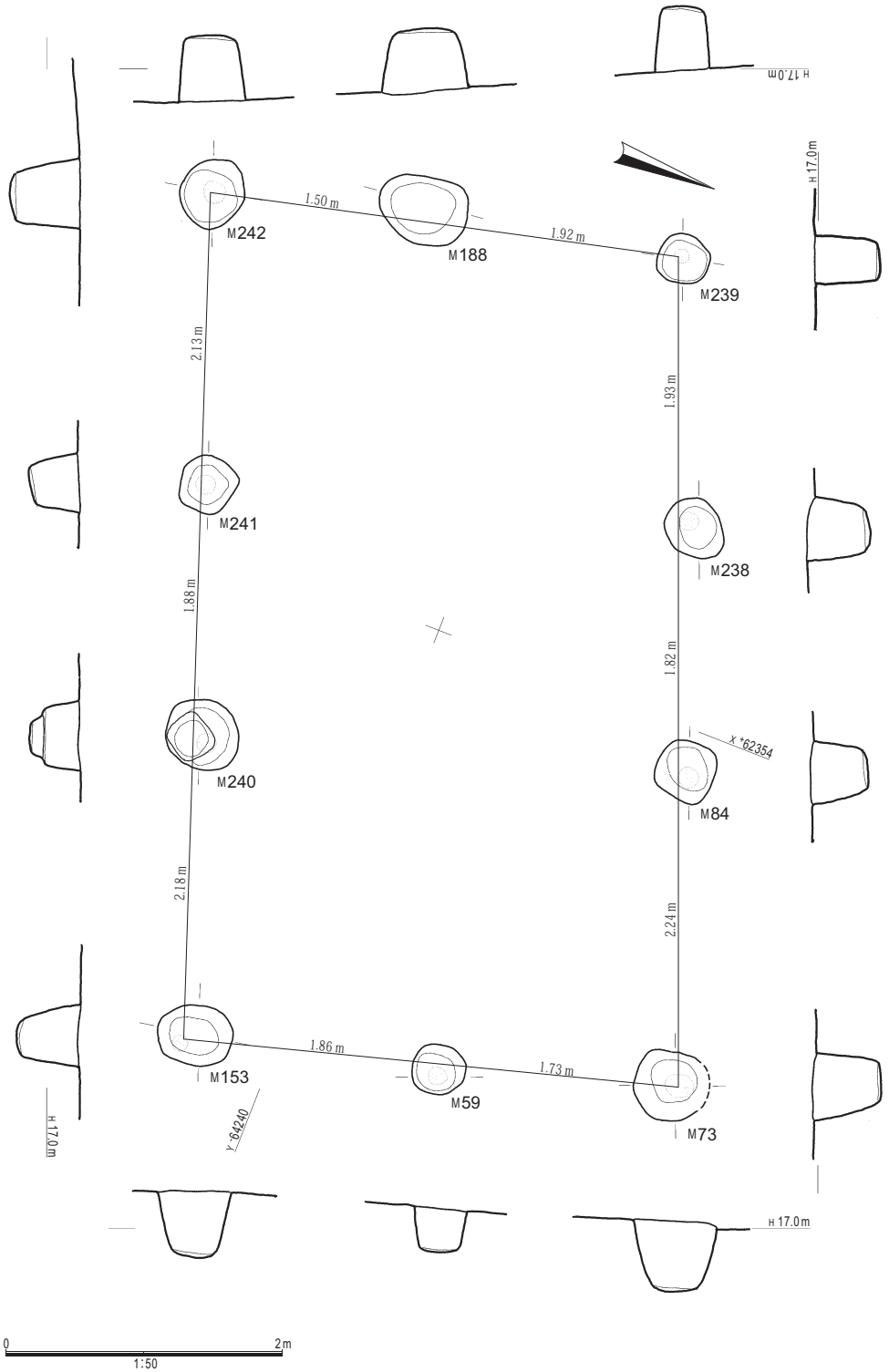


図16　掘立柱建物 233 (1：50)

部の細片で判然としないが、高台が底部縁に位置し体部がそのまま立ち上がる器形とみえる。

遺物は、11 世紀代までの資料を含む。

掘立柱建物233（図 16･17）

調査区北半部、G34-46 区に位置する。掘立柱建物 264 と平行し、南妻側の 2 基の柱穴が掘立柱建物 12 柱穴と重複して新しい。平面規模は 2 間× 3 間で、梁行が南北方向を向く。平面形は平行四辺形状となる。建物の長軸は北から 20°西へ振れる。建物を構成する柱穴は、不整な円形状、隅円方形、楕円形状と各様である。円形状・方形状の柱穴は、径・辺 0.4 m～ 0.5 m規模であり、楕円形のものでも長さが 0.7 mを超える柱穴は含まれない。調査面で柱痕跡を確認できたものが大部分である。柱穴 240 底面には片側によって一段低い部分がある。柱圧痕か。平側では、柱穴はほぼ一直線に配列するが、妻側では両側とも僅かに外方へ逸れた位置に間柱が設置されている。建物の平面規模は、北妻側で梁行 (柱穴 242 ―柱穴 239)3.43 m、南妻側で梁行 (153 ― 73)3.60 m、東面桁行 (239 ― 73) で 6.02 m、西面桁行 (242 ― 153) で 6.13 mとなる。また、間柱位置での梁行は北から (241 ― 238) で 3.51 m、(240 ― 84) で 3.50 mとなる。側柱の柱間は図 16 中に示す。

柱穴掘方底面高度をみると、隅柱が間柱より一段低い。また全体として西側柱穴より東側柱穴の底面が 0.2 m程低い位置にある。

掘立柱建物233柱穴出土遺物 (図44)　　建物を構成する各柱穴から少量ずつ遺物が出土した。いずれからの遺物につても土器は細片化し、器表は著しく荒れていることから、大半の資料について詳細不明。

以下、柱穴ごとに遺物の構成を記す。

柱穴 59　土師器 (坏) ほか土器。

柱穴 73　土器 (詳細不明)、須恵器 (甕か)、陶器 (甕か)。

柱穴 84　土器 (詳細不明)。

柱穴 153　柱痕跡：土器 (詳細不明)。

柱穴 188　柱痕跡：土師器。

柱穴 234　柱痕跡：鉄滓

柱穴 238　堀方：弥生土器。

柱穴 239　土器 (詳細不明)、陶器 (壷)。

柱穴 240　堀方：陶器 (壷か)。柱痕跡：弥生土器。

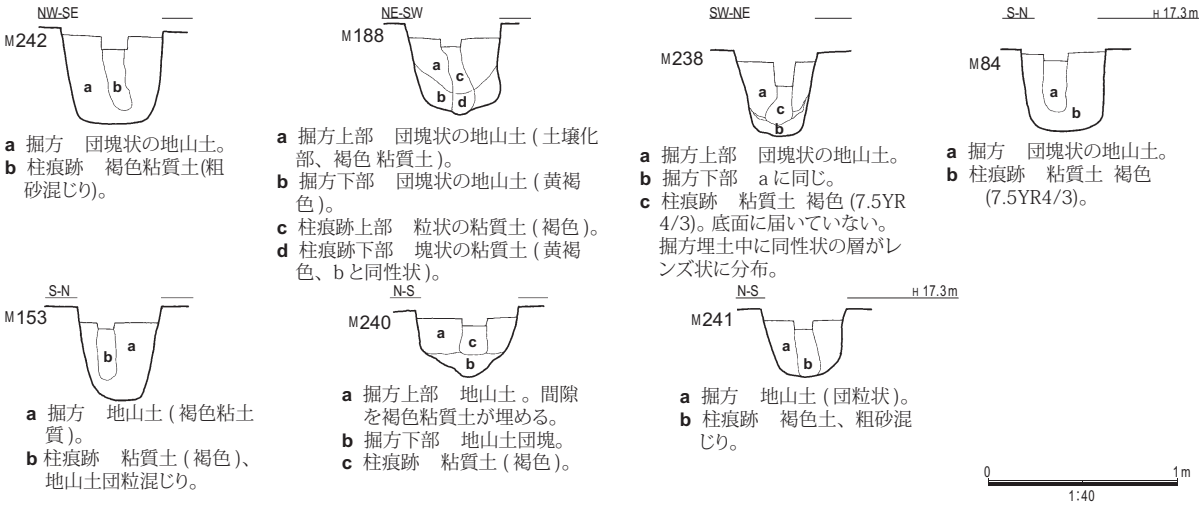


図18　掘立柱建物 233 柱穴土層 (1：40)

柱穴 241　須恵器 (壷)。

柱穴 242　堀方：弥生土器、陶器 (壷か)。

いずれの遺物も細片に過ぎて図示できない。出土遺物中、陶器とするものが柱穴柱穴埋土若しくは掘方埋土から出土した。大形器形の体部細片であり、柱穴 73 出土の R515 と柱穴 153 出土の 516 が接合する。また同様に R321(柱穴 240) と R517(柱穴 241)・R506(柱穴 242) が接合する。柱穴 240 ～ 242 は、建物北面の隣接する柱列である。また、接合しないが柱穴 239(R507) からも出土している。これらはすべて同一個体と見える。この陶器は内外面平滑で、外面に暗褐色の釉の痕跡が残る。球形の体部であったと見えるが、原形を復原できる資料が含まれていない。これと同一個体と思われる資料が、凹地 2 出土遺物に 1 点含まれている (R514)。ここにあげた以外に野方平原 3 次調査では同種遺物の出土はなく、一連の柱穴から出土するといった出土状況からみて、意図的に柱穴埋土に埋め込まれた可能性が高いものと考えられる。遺物が細片資料のみであり、分類、内容ともに詳細不明。

掘立柱建物247 (図19～21)

調査区南半部、他の掘立柱建物とは離れて G34-45 区に位置する。掘立柱建物として報告するが、北東の隅柱を欠く。想定位置 (北東隅柱) を周囲も含め掘り下げてみたが、確認できなかった。この位置の柱を前提とするならば 2 間× 2 間の総柱建物となる。柱穴は総じて大形で、平面形は不整な円形状、隅円方形状を呈す。調査面、断面の観察では、半ばの柱穴で柱痕跡を確認した。また、底面に柱圧痕が残る柱穴がある。縦横 0.7 m台の規模の柱穴が最も多いが、最大規模のものでは縦横 0.8 m台のもの、小規模の柱穴では 0.6 m前後の規模までの幅がある。柱穴底面の高度は標高 16.8 mから 16.4 m までの幅がある。中央の柱穴 161 が最も深い。底面深さからいえば柱穴の位置関係の中で、一定の傾向は顕著ではないが、南西部に底面高が高い柱穴が集まる傾向は見ることができる。柱間隔は 1.2 m 台から 1.7 m台までの比較的大きな変異がみられる。南北方向ではよく通るが、南方に収束する方向をとる。それに比して東西方向では柱穴位置の振れが顕著といえる。

建物の平面規模について、東西

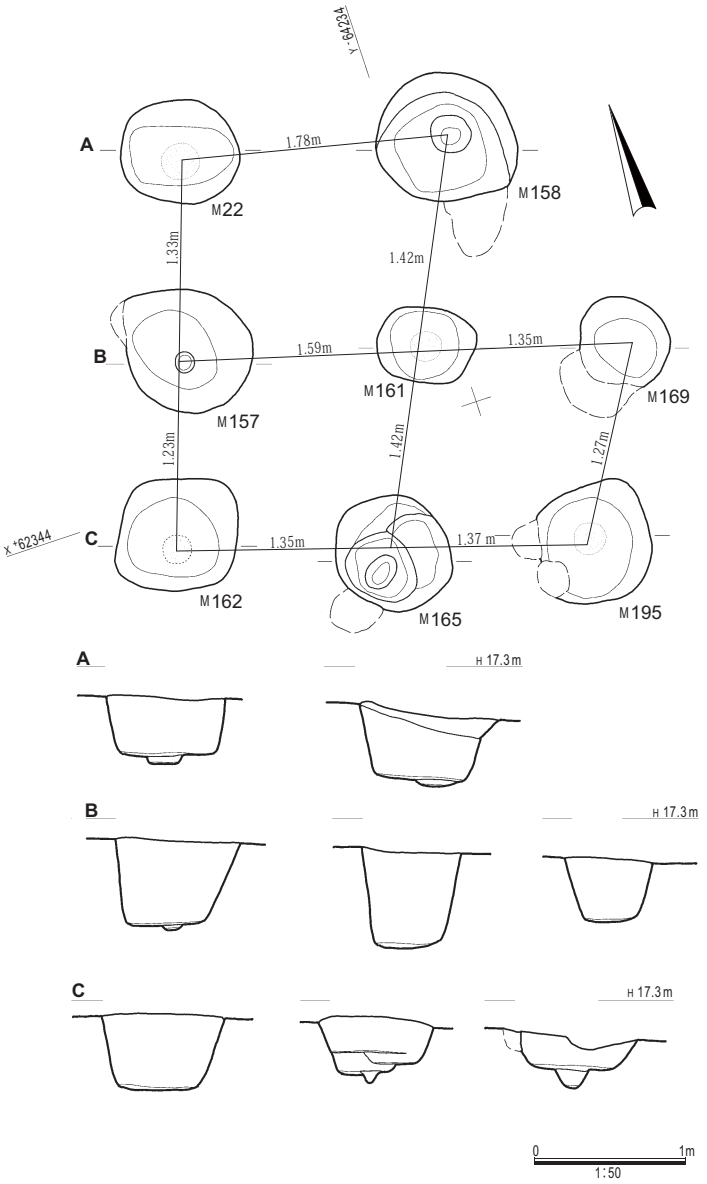


図19　掘立柱建物 247 (1：50)

図20　掘立柱建物 247 (北から)

柱筋では、北側は想定隅柱を欠き、中央 (柱穴 157 ― 169) で 2.96 m、南側 (162 ― 195) で 2.74 m となる。南北柱筋は、東側は想定隅柱を欠き、中央 (158 ― 165) で 2.86 m、西側 (22 ― 162) で 2.57 mとなる。各柱穴間の距離は、図 19 中に示す。柱穴掘方は、主として地山土を用い、埋めている。

上述したように、想定する隅部では柱穴を検出することができなかった。本来Ｌ字状の平面形を持った構造物であったのか、複数構造物の重複したものであるのかは不明確である。

掘立柱建物247柱穴出土遺物　　建物を構成する各柱穴から少量ずつ遺物が出土した。いずれからの遺物につても土器は細片化し、器表は著しく荒れていることから、大半の資料について詳細不明。

以下、柱穴ごとに遺物の構成を記す。

柱穴 22　弥生土器 (甕)、石鍋。

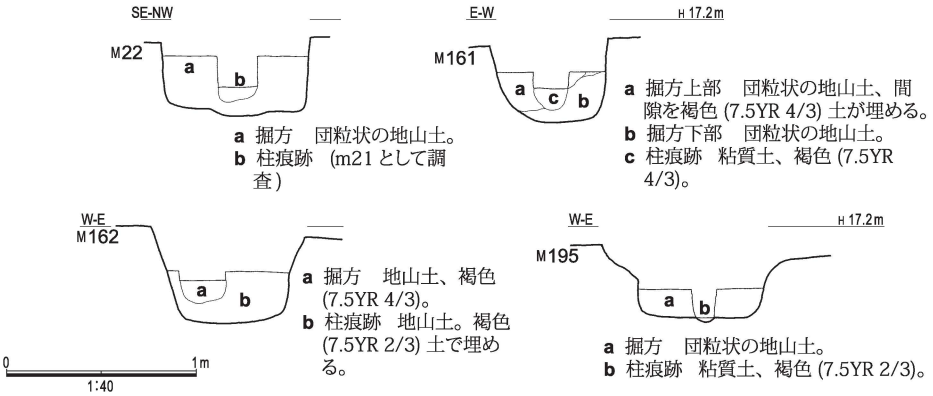


図21　掘立柱建物 247 柱穴土層 (1：40)

柱穴 157　土師器、弥生土器。
柱穴 158　土師器、弥生土器 (終末期高坏か)。
柱穴 161　土器 (土師器・弥生土器)、須恵器 (坏か)、鉄滓。
柱穴 165　土器 (土師器、弥生土器)、剥片類。
柱穴 167　黒色土器 (碗) か。
柱穴 182　土器 (弥生土器ほか)。

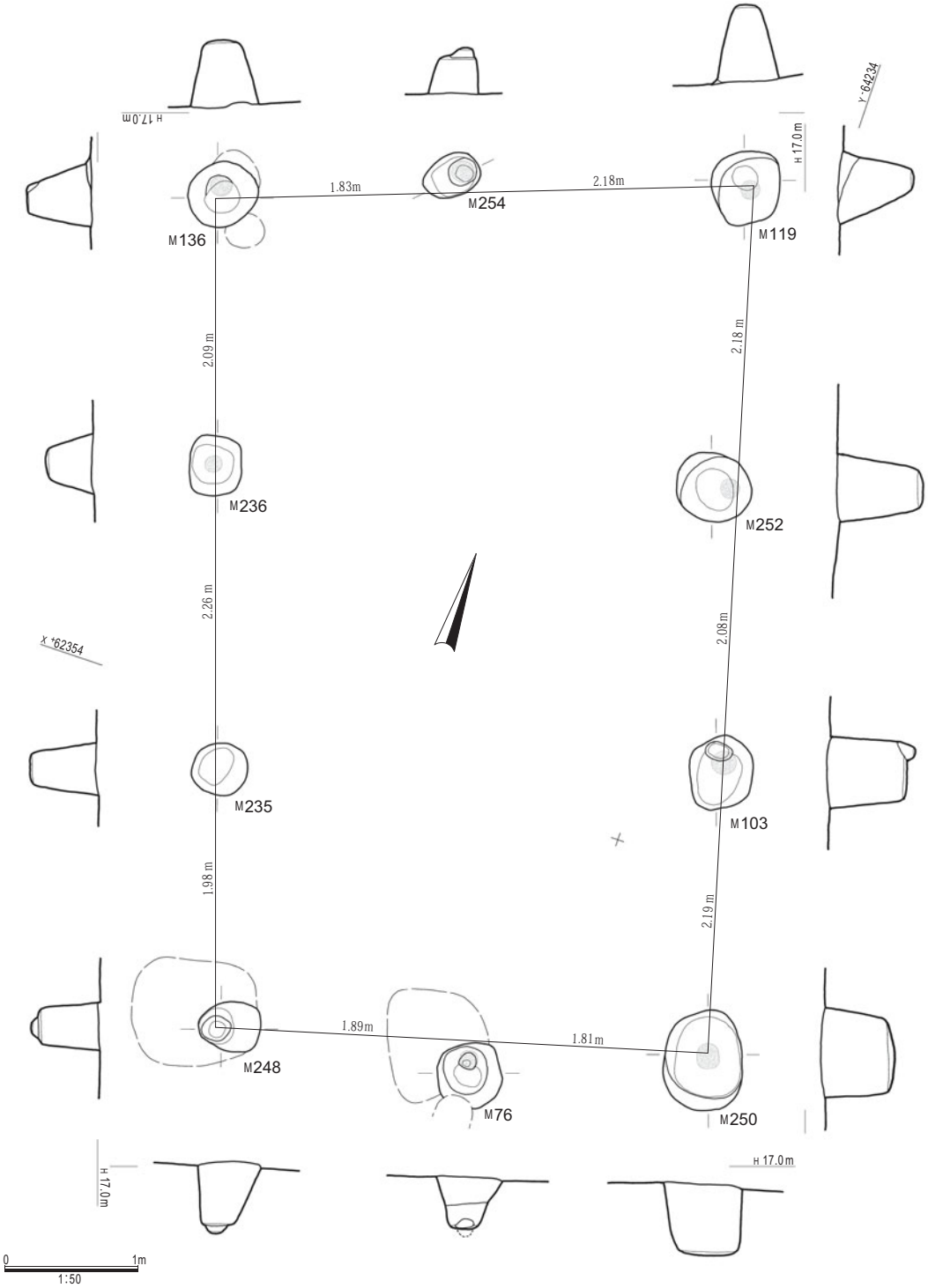


図22　掘立柱建物 264 (1：50)

遺物は、不明瞭ながら 11･12 世紀の資料までを含む。

掘立柱建物264 (図 22･23)

調査区北半部、G34-46 区に位置する。掘立柱建物 233 と平行するように、東側に位置する。南妻側の柱穴 2 基が掘立柱建物 12 柱穴と重複して新しい。南妻側の柱筋は、掘立柱建物 233 のそれと一致し、かつ柱穴が重複するように掘立柱建物 12 北側柱筋とも一致することになる。掘立柱建物 264 の平面規模は 2 間× 3 間で、桁行を南北方向にとり、この点でも掘立柱建物 233 と一致する。梁行は南側へ狭く、台形状となる。建物の長軸は北から 17°西へ振れる。

建物を構成する柱穴は、不整な円形状、隅円長方形、楕円形状と各様である。長方形、楕円形状の柱穴は軸が、建物柱列に沿うものが多い。柱穴の径・長さは 0.4 m～ 0.5 mの規模に納まるものが大半で、例外的に長さ 0.6 m台の柱穴がある。柱穴 248 以外では調査面若しくは、断面で柱痕跡を確認できた。柱穴 248 には底面に柱圧痕が残る。建物 233 と同様、平側では、柱穴はほぼ一直線に配列するが、妻側では、柱筋より僅かに外方へ逸れた位置に間柱が設置されている。

建物の平面規模は、梁行が、北妻側 (柱穴 136 ―柱穴 119) で 4.00 m、南妻側 (248 ― 250) で 3.72 m、間柱間は、236 ― 252 で 3.86 m、235 ― 103 で 3.81 mを測る。また、桁行は、東平側 (119 ― 250) で 6.48 m、西平側 (136 ― 248) で 6.32 m、中央の間柱間で 6.68 mを測る。各柱間の寸法は図 22 に示す。柱穴底面高度をみると、高低の変異が大きいが、全体として西側柱穴より東側柱穴の底面が低い位置にある。

掘立柱建物264柱穴出土遺物　　建物を構成する各柱穴から少量ずつ遺物が出土した。いずれからの遺物につても土器は細片化し、器表は著しく荒れていることから、大半の資料について詳細不明。以下、柱穴ごとに遺物の構成を記す。

柱穴 76 弥生土器か。

柱穴 103 堀方：土器 (土師器ほか、詳細不明)、須恵器 (甕：平行叩き目・同心円状当て具痕)、陶器 (格子目叩き痕、内面同心円状当て具痕)。 柱痕跡：須恵器 (摘付き蓋か)、鉄滓。

柱穴 119 土器 (詳細不明)。

柱穴 136 堀方：土器 (弥生土器か)。 柱痕跡：土器 (詳細不明)。

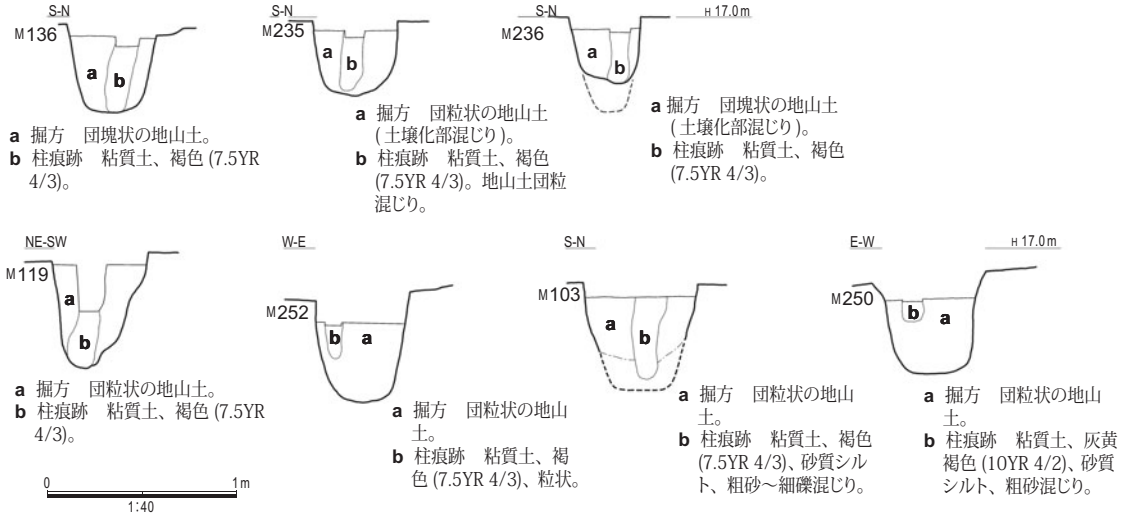


図23　掘立柱建物 264 柱穴土層 (1：40)

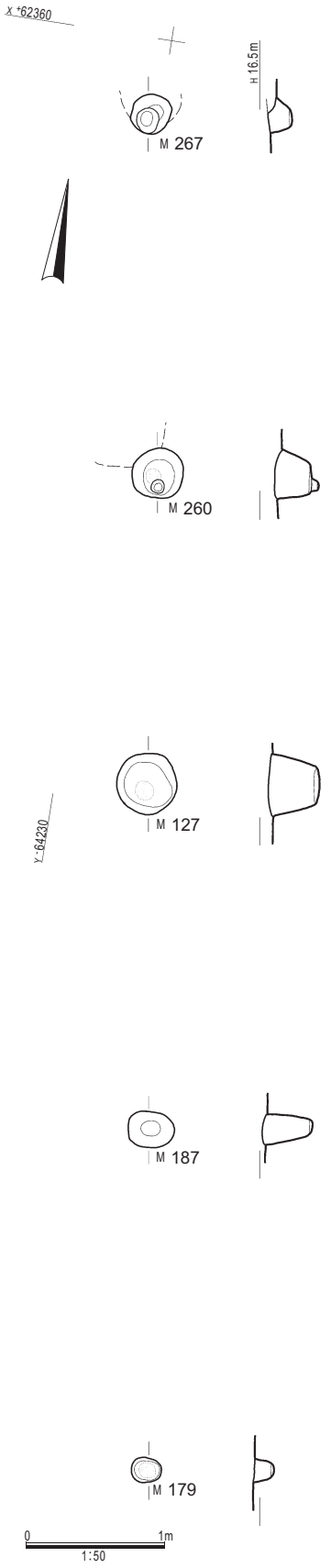


図24　柱列 266 (1：50)

柱穴 235　堀方：土器 (土師器ほか)、須恵器、鉄滓。　柱痕跡：土器、陶器 (壷か)、鉄滓。

柱穴 236　堀方：土師器。　柱痕跡：土師器。

柱穴 248　土器 (詳細不明)。

柱穴 250　弥生土器 (後期壷か)、土器 (土師器か)。

柱穴 252　土器 (土師器か)。

柱穴 254　土器 (詳細不明)。

8 世紀代とみられる須恵器細片、土壙 106 出土陶器と同種陶器の細片等が混じるが詳細不明。

柱列266（図 24)

調査区東辺部に沿って G34-37 区に位置し、東辺部の勾配が大きくなる斜面に等高線に沿って、南北方向に柱穴が並んでいる。北側は調査区外となり、南側は調査区内で終わる。4 間分の柱穴を検出した。柱穴は、掘立柱建物のそれよりも小形で、不整な円形、楕円形状となるものがあり、柱筋が通っている。柱列の延長は、7.8 mほどとなる。柱穴間の距離は、図 24 中に示す。柱穴の規模は径・長が 0.2 mから、0.4 m台のものまでがあるが、0.3 m辺りに中心がある。5 基の柱穴のうち、3 基について調査面で柱痕跡を確認した。柱穴底面は、中央の柱穴を中心に地山地形に合わせるように、南北両方向に向って高くなっている。

柱列266柱穴出土遺物　　柱穴 179･187･260 から少量ずつ遺物が出土した。いずれからの遺物につても、土器は細片化し、器表は著しく荒れて、大半の資料について詳細不明である。

以下、柱穴ごとに遺物の構成を記す。

柱穴 127　弥生土器か。

柱穴 179　弥生後期土器 (甕)、土器 (詳細不明)、鉄滓。

柱穴 187　土師器。

柱穴 260　土器 (詳細不明)、須恵器 (碗)。

古代の須恵器碗があるほかに、土師器とみられる土器細片が混じる。

遺構237（図 25･26)

調査区南東部で G34-35･45 区に位置する。調査区東辺に近く、東へ下る傾斜部肩に位置する。東西方向の細い溝 220 から、同様の溝が南側へ直角方向に派生し、さらにそれから西方向へ派生している。東西方向の溝を境として南側には、地山暗褐色土に黒褐色粘質土が混じって少量の遺物を含む層が分布し、その層下で、南へ伸びる幅広の溝状の落ち込みが検出された (遺構 222)。溝 220 に落ち込むようにして弥生土

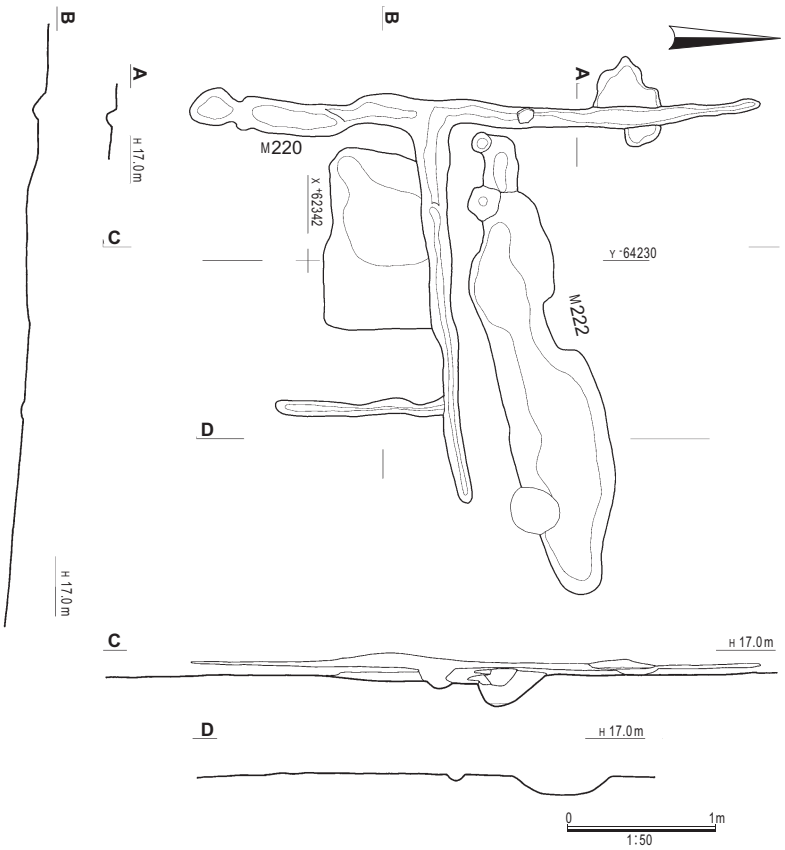


図25　遺構 237 (1：50)

器が出土している。溝 220 と遺物包含層の有り様は、竪穴住居の壁溝と貼床の一部かと考えられるが、具体的な住居形状を復原することができない。柱穴とできるものも確認できなかった。

遺構237出土遺物（図 40, 表 5)

遺物は各部から少量出土した。大半は細片化した土器であり、器表は荒れて、詳細不明である。判別できる資料には、弥生土器のほか、土師器、須恵器甕の細片資料が含まれる。

図 40 に、溝 220 出土遺物を示す。269 は弥生土器甕である。体部下部破片で、器表は著しく荒れて調整不明。

土壙4（図 27・29)

先述したように、調査区中央の掘立柱建物 12 の中心部 G34-

図26　遺構 237 (北から)

4641 区に位置する。凹地 2 の覆土につながるような位置で、2 基の不整な楕円形状の土壙が重複したような状態で検出した。浅く開いた断面形で、東部分が西部分より一段深い。凹地 2 と同様覆土は暗褐色粘質土である。東側壁面、西部底面から大破片の土器が出土した。東側の壁面に沿うような一群の土器は、一部肩を乗り越えて外側まで続いている。このことから、土壙 4 は現状の肩部から更に緩く立ち上がる広いものであったことが想定される。また、土壙 4 は、掘立柱建物 12 の中心に位置することから考えると、建物 12 に伴う何らかの祭祀的な意味合いを持ったものであったのかもしれない。

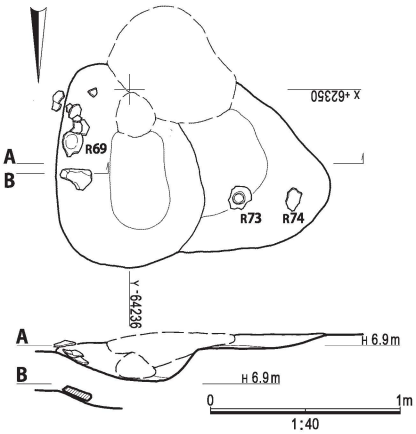


図27 土壙 4 (1：40)

東西の 1.4 m、南北 1.1 mの規模で、深さは東部分が 0.3 m、西部分が 0.1 m程の規模である。

土壙4出土遺物 (図28, 表4・5)　遺物は、上記した様な出土状態のほかに覆土中からも出土した。総量で大ポリ袋程の

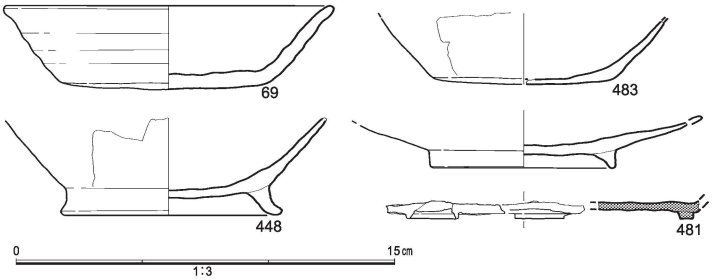


図28 土壙 4 出土遺物 (1：1,1：3)

図29 土壙 4 (北から)

分量となった。土師器碗・坏・皿、須恵器坏のほかに弥生土器の出土があった。図 28 に出土遺物を図示する。69･483 は土師器坏である。448 は土師器碗である。体部の剥落が著しく、器厚が極端に薄くなっている。口縁部を欠く。73 は土師器皿である。481 は須恵器底部細片である。坏とする。

図示したうち、69･448 が遺構東側壁、73 が西部底面からの出土である。9 世紀代。

土壙96（図 30･31)

調査区中央東に寄った G34-45 区に位置する。平面が不整な隅円方形状で、断面低い逆台形状となる。覆土は暗褐色土で、広い底面には凹凸があり、中央西に寄った位置で、炉壁の様な焼土塊を検出した。覆土中に鉄滓等関連遺物の出土はなかった。長さ 0.9 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 mほどの規模である。

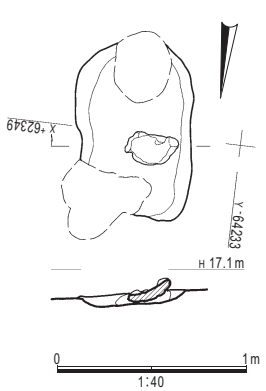


図30　土壙 96 (1：40)

図31　土壙 96 (東から)

土壙96出土遺物　　覆土中から散漫に少量の遺物が出土した。土器は細片で器表は著しく荒れている。須恵器蓋、土師器の体部細片のほか、弥生土器が出土した。図示しないが須恵器蓋の年代は 8 世紀後半代か。

土壙106（図 32･33)

段落ち 1 調査時、G34-4623 区で検出した。段落ちに接した位置で、段落ち 1 との重複関係は、それに属するものかということも含めて不明。平面形は不整な円形状、断面は大きく上方に開き、逆台形状を呈す。覆土は段落ち 1 と同様、暗褐色粘質土であり、覆土によって区分することはできなかった。長さ 1.1 m、幅 1.0 m、段落ち 1 底面からの深さ 0.4 mを測る。

土壙106出土遺物（図 9･44, 表 4)　　覆土中から遺物が散漫に出土した。総量で中ポリ袋程の分量となる。土器は細片化したものが殆どで、その器表は著しく荒れている。陶器壷で上半部器形が復原できる資料が出土したほかは、弥生土器壷・鉢、分別不能の土器片、鉄製刀子断片が出土している。図 9 に出土遺物を図示する。

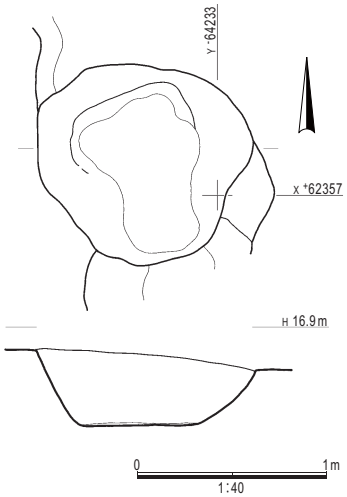


図32　土壙 106 (1：40)

123 は陶器壷である。体部破片 (480) と合わせて口縁から胴部上半部までを復原できる。口唇部を欠くが、盤口壷の形態となる。肩部以下の外面に格子目の叩き目、内面に同心円状の当て具痕が残る。斑に厚い釉が掛かるが、肩部、口縁部内面に厚く、頸部の片側、口縁の下面には掛かからないことから自然釉か。樹脂状光沢をもち、灰オリーブ色を呈す。肩部の復原径 14.5cm となる。494 は終末期弥生土器鉢、493 は後期弥生土器壷か、いずれも器表荒れて詳細不明。402 は鉄器で、折損部近くで幅を増しており、この位置を区として刀子茎部とする。

土壙138（図 34）

調査区北部、G34-4654 区に位置する。別遺構と重複して古く、半ばを欠く。不整な長方形状となるものと見える。浅い皿状の状態で遺存する。底面が被熱赤化し、覆土は黒色、炭混じりとなる焼土壙である。長さは 1.1 m、現状の幅 0.8 m、調査面からの深さ 0.1 m を測る。

土壙138出土遺物　　遺物は細片化した土器が極少量出土した。器表著しく荒れて詳細不明、弥生土器か。

図33　土壙 106 (北から)

小穴5（図 35･37）

調査区北辺部、G34-4741 区に位置する。柱穴として良いような形状、規模の遺構である。平面楕円形で長さ 0.5 m、幅 0.3 m、深さ調査面から 0.4 mを測る。調査面では柱痕跡は確認していない。覆土は暗褐色粘質土で、粗砂が混じる。

調査面からやや掘り下げた位置で、弥生土器器台が 3 点、礫とともに投入された状態で出土した。土器は、掘方上半部の同じ深さに纏まっている。土器はいずれも完形のものはない。土器出土位置からやや下がった位置からは礫が出土した。

小穴5出土遺物（図 36, 表 5）　　上述したように、弥生土器器台が纏まって 3 点出土した。別に壷口縁部破片が出土している。図 36 に出土遺物を示す。312･313･311 は弥生土器器台である。312 は 1/4 周の破片で縦に分割した様な状態である。器表荒れて剥落。313 は上下部の大部分を欠く。器表荒れて剥落。311 は下部を欠く資料である。いずれも外面に刷毛目調整を行う。312 は体部全体を絞り、器厚が大、313･311 は受部直下を絞り、以下は裾までなだらかに開き、器厚が小という差がみられる。いずれも後期。484 は弥生中期土器高坏か。口縁部細片資料で、器表は全面剥落して調整の詳細不明。

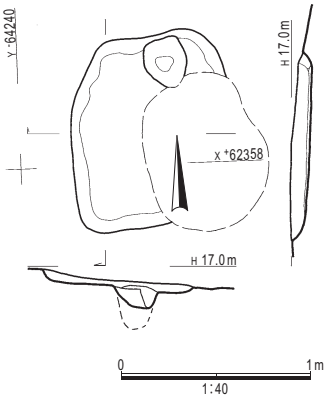


図34　土壙 138 (1：40)

小穴42（図 38･39）

調査区中央部、G34-4535 区に位置する。柱穴としてよいような形状、規模の遺構である。ちなみに、ここでいう「小穴」形状の整った比較的小形の掘り込みのうち、柱穴とした以外のものに対する呼称である。平面不整な円形で径 0.4 m、深さ調査面から 0.6 mを測る。調査面では柱痕跡は確認できなかった。覆土は暗褐色粘質土。

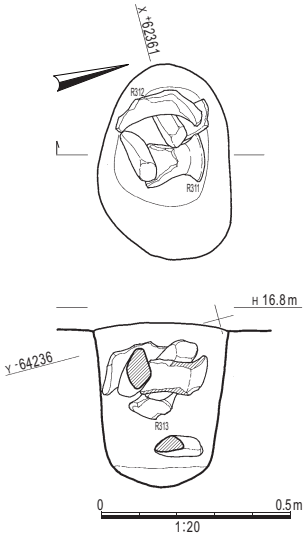


図35　小穴 5 (1：20)

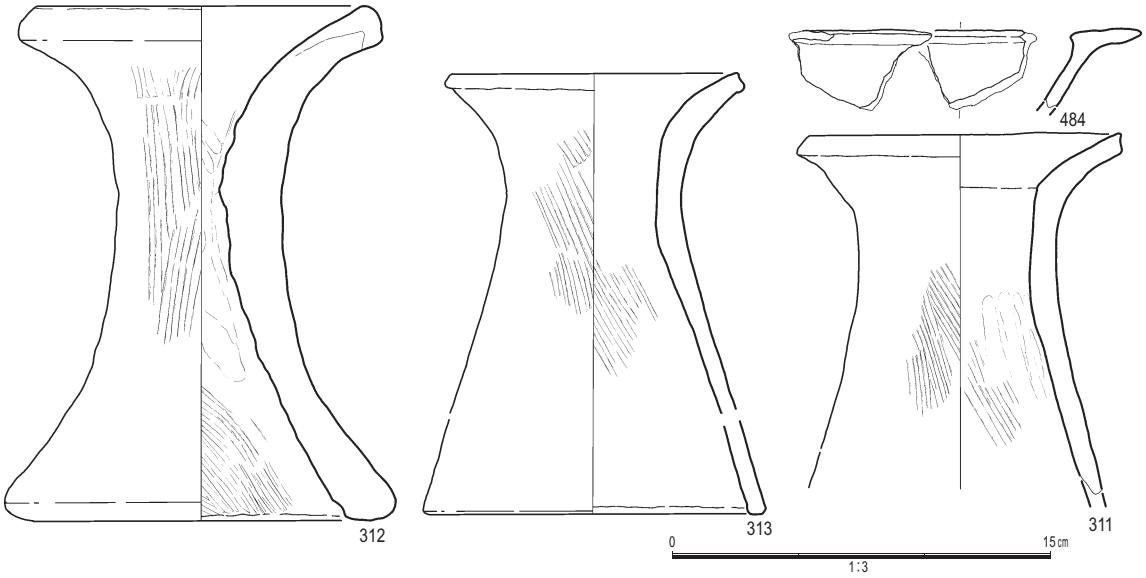


図36　小穴５出土遺物 (1:3)

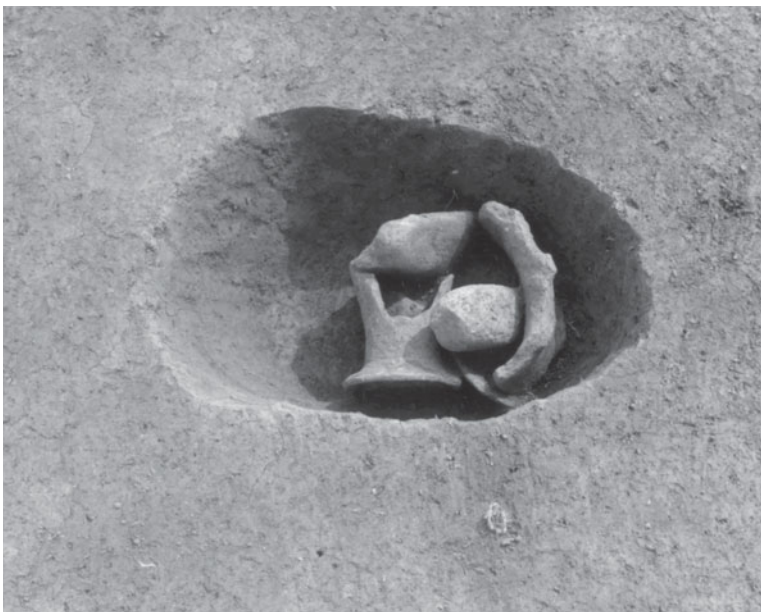


図37　小穴５(北から)

調査面から 0.2 m掘り下げた位置で、弥生土器小形甕が出土した。口縁部を欠くほかは、ほぼ完形の資料で、横位の状態で埋没していた。内部に遺構埋土が入り込んでいたが上部には空隙が残っていた。

小穴42出土遺物 (図36･44 , 表5)　303は弥生土器甕である。口縁の大部分を欠くほかは、全形を残している。外面は全体の器表が剥落しており、調整不詳。復原する口縁部径 9.0cm、底部は僅かに球面状となり、径 3.5cm、器高は 11.5cm となる。器厚は全体に極薄い。遺構からはほかに細片化した土器片が少量出土した。細片のため詳細不明であるが、弥生土器か。

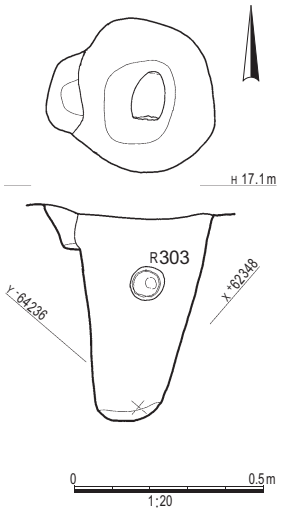


図38　小穴 42 (1：20)

野方平原3次調査出土遺物 (図40～43･44 , 表5～7)

これまでに報告した以外の遺構からも遺物が出土した。また、採集、表土中出土によるものもある。これらのうち、実測できたものについて、弥生土器ほか、土師器・須恵器、瓦、石器類、採取・表土出土土器、玉類・石器類・金属製品・土製品図の順で、図 40 ～ 43 に示し、概要を記す。また、個別の詳細を表 5 ～ 7 に記す。

図 40 上段に弥生土器ほかを示す。大部分の資料は器表が著しく

荒れて調整の詳細は不明である。499(小穴 81) は、晩期縄文土器の体部破片である。粗製土器で内外面に条痕文が残る。判然としないが、口縁下の屈曲部資料か。

499(不整な落ち 86) は、陶質土器体部細片である。外面に縄目叩き目が残る。

ちなみに、ここでいう「不整な落ち」は、形状不整で、意図して掘削されたとは見えらないような落ち込みに対する呼称である。

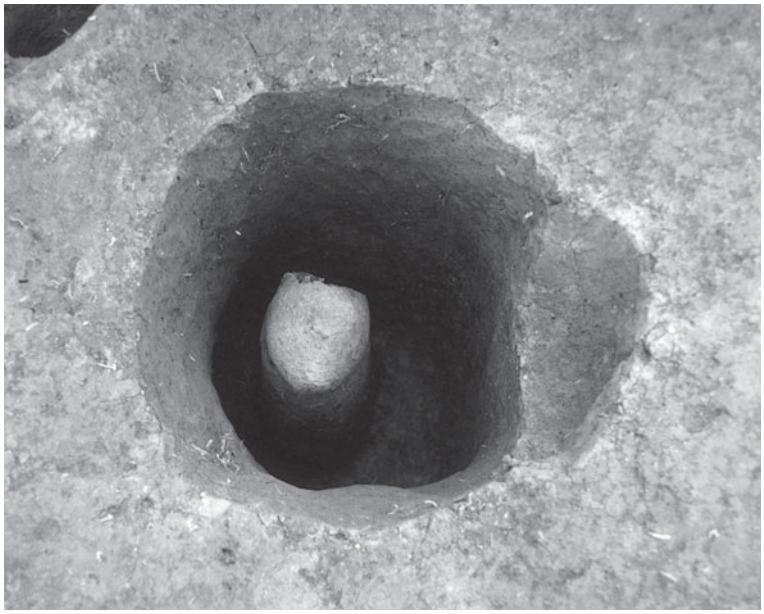


図39　小穴 42 (北から)

337(小穴 243 は弥生土器壷である。518(不整な落ち 58) は、弥生土器高坏口縁部細片。終末期か。509(土壙 255) は終末期弥生土器甕の口縁部小破片。29(不整な落ち 27) は後期弥生土器壷の体部細片である。498(小穴 170)・508(土壙 255) は後期弥生土器甕口縁部細片である。500(土壙 200) は後期弥生土器甕底部小破片である。底面が僅かに凸面となる。450(小穴 243) は後期弥生土器台付き甕体部下半部の破片である。台部は接合部で脱落している。488(土壙 35) は弥生土器の把手部のみの資料である。接合部で剥落したもの。496(溝 156) は小形の手捏ね土器で、口縁部を欠く。

図 40 下段に土師器・須恵器を図示する。

土師器については、器表が著しく荒れて調整の詳細は不明である。503(小穴 191) は土師器碗底部。高台から体部が立ち上がる。細片化した体部破片があるが、接合しない。9 世紀前半期か。

502(柱穴 190) は須恵器蓋細片である。口縁部外面に凹線が残る。焼け歪みが著しい。485(小穴 18) は須恵器蓋の細片資料である。赤焼きで、屈曲部上辺部に回転篦削り調整。古墳時代後期。487(柱穴 32) は須恵器碗口縁部細片資料である。486(小穴 31) は須恵器とするが、酸化炎焼成によっており、軟質。器形も須恵器の範疇には当てはまらない。土師器の器形とも異なり、底部縁に沿って低い高台を形成している。胎土は緻密。器形は碗か。62(柱穴 55) は須恵器坏底部破片である。495(不整な落ち 131) は土師器碗である。492(樹根痕 98) 須恵器で、把手部の資料である。上部が体部との接合部、下部は折損している。

図 41 上段に瓦・陶磁器を図示する。

135(小穴 118) は平瓦である。同一個体と見える 2 点が出土したが、接合しない。須恵質、堅緻。

501(小穴 185) 李朝青磁輪花碗か、外面に 2 条縦方向の凹線を刻む。口縁部細片資料。504(小穴 217) 明染付碗か、口縁部細片資料である。図 41 下段に石器類を図示する。

40・41・42 は不整な落ち 37 から出土した。不整な落ち 37 は、一片が 0.4 mほどの浅い皿状の落ち込みで、上記 3 点はその底部から出土した。37 は、三角形で厚板状の石材の両面に、加撃による浅い凹面が形成されている。側面に人為的な変更は観察できなかった。凹石とする。41 は、玄武岩円礫の一端に衝撃による剥離が認められた。敲石とする。42 は、偏平な砂岩亜円礫の側縁に部分的な打ち潰し状痕が残る。敲石とする。

31・30 は、不整な落ち 27 から出土した。不整な落ち 27 は、G34-4514 区に位置し、2 基の小穴が

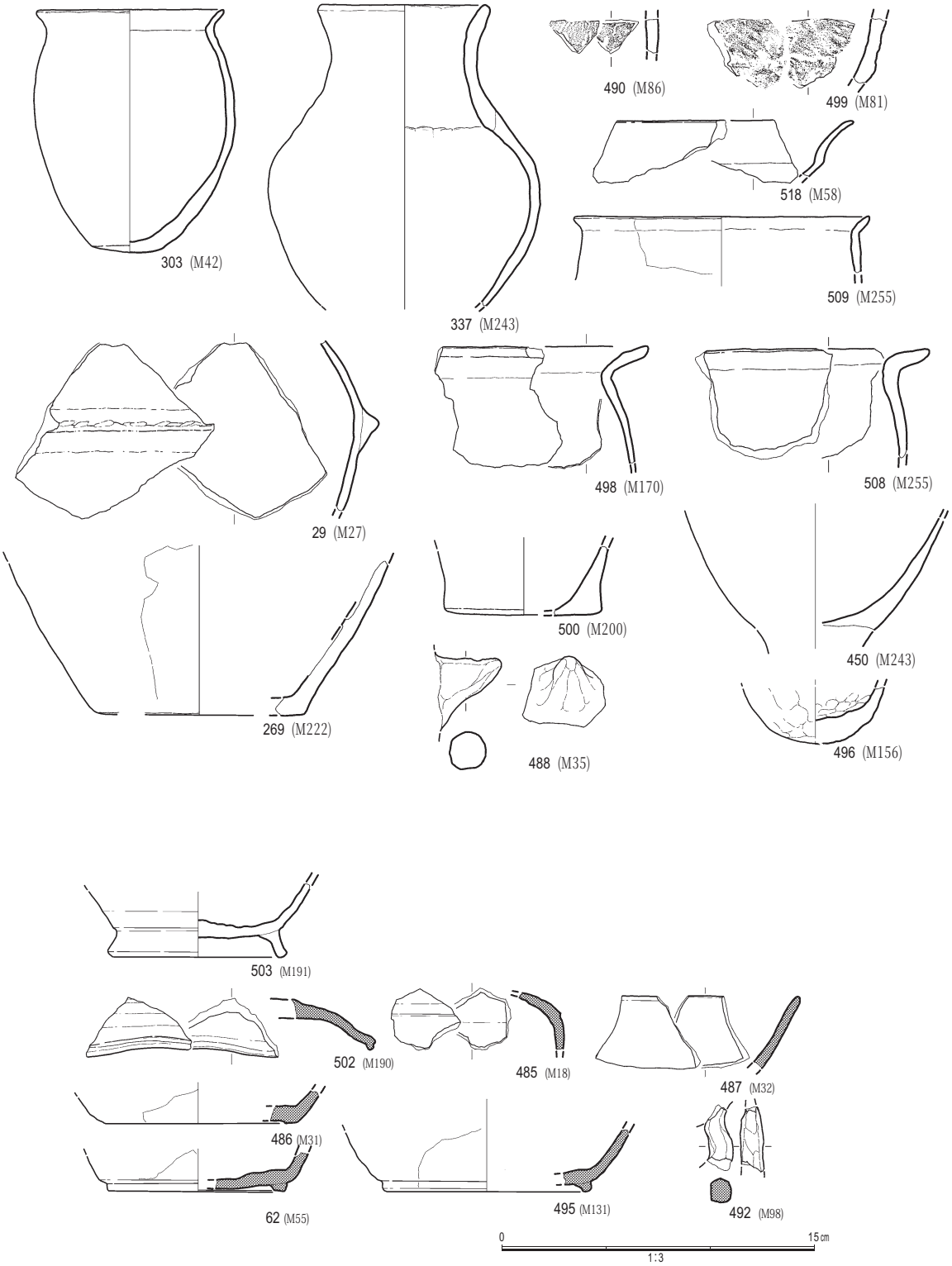

303 (M42)
337 (M243)
490 (M86)
499 (M81)
518 (M58)
509 (M255)
29 (M27)
498 (M170)
508 (M255)
269 (M222)
500 (M200)
450 (M243)
488 (M35)
496 (M156)
503 (M191)
502 (M190)
485 (M18)
487 (M32)
486 (M31)
62 (M55)
495 (M131)
492 (M98)
0
15cm
1:3

図40　出土遺物 (1)　1:3

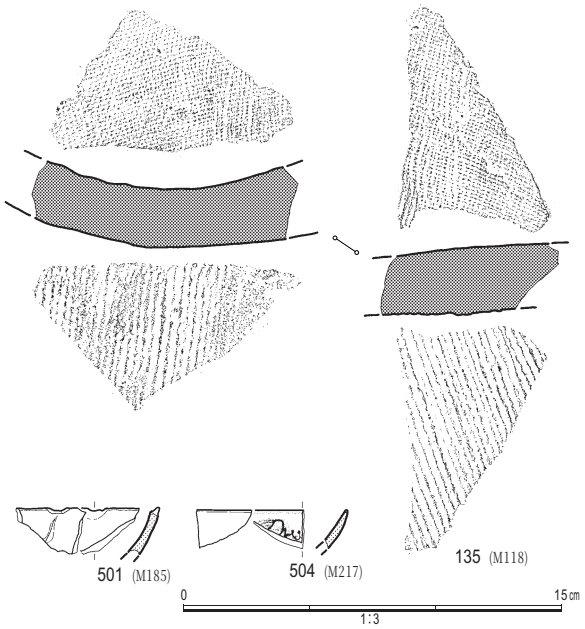
重複したような形状をして浅い。長さは 0.6 m 程である。30・31 はその各部の底面から出土した。31 は偏平な円礫を用い、側縁部に敲打痕が集中分布し、剥離面を生じている。敲石とする。30 は細長い長方形の板状で、表裏面に砥面を形成する砥石である

170(撹乱 154) は長方形板状の砥石。側面は切断整形している。近現代のものか。

図 42 に採集、表土出土遺物を図示する。

10 は、G31-46 区遺構確認時出土の緑釉陶器。出土時ガラス状光沢をもつ薄い釉が残っていたが、洗浄時に剥落し殆ど残っていない。

須恵器 511・445・512・446 は採集資料で、511 は蓋、低い宝珠形摘みがつく。445 は高台



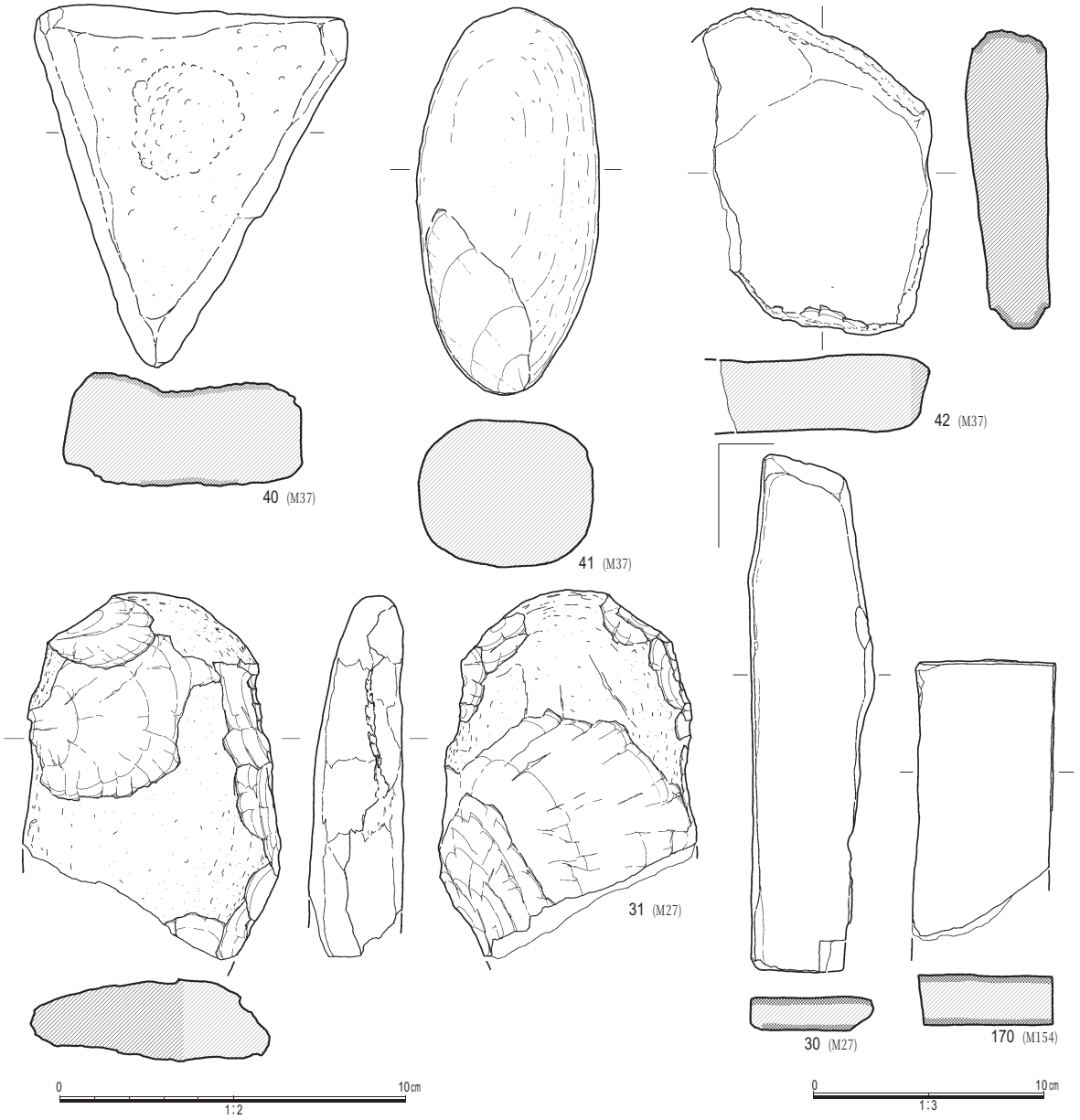


図41　出土遺物 (2)　1:2,1:3

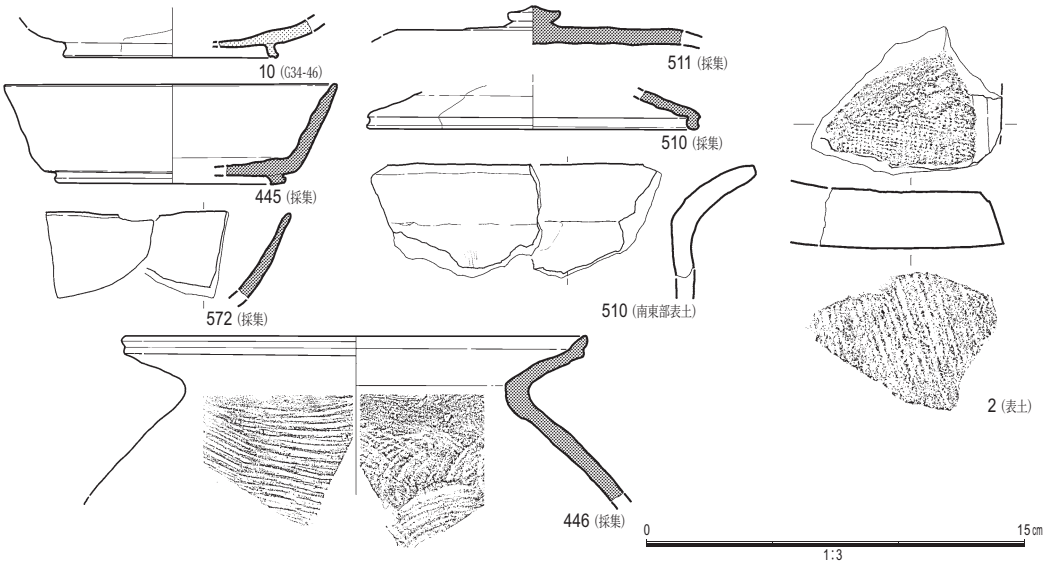


図42　出土遺物 (3)　1:3

坏。512 は須恵器碗口縁部細片。446 は、甕口縁部小破片である。510 は G34-47 区出土須恵器蓋である。

513 は南東部表土出土の土師器甕口縁部細片である。2 は表土出土の土師質平瓦細片である。

図 43 に玉類、石器類、金屬製品、土製品を図示する。

11(柱穴 6) は、ガラス製小玉である。つよい緑みの青色を呈す。

220(小穴 201) は石製勾玉。溶結凝灰岩製か、風化したような灰白色を呈す。

3(G34-45 区) は、石鏃である。

466(小穴 141) は石核である。亜角礫の原材の礫面を打面としている。

9(小穴 3) は、薄い板状の金銅製の製品残欠である。形状を復原できない。225(小穴 206) は、土錘である。両端を欠く。

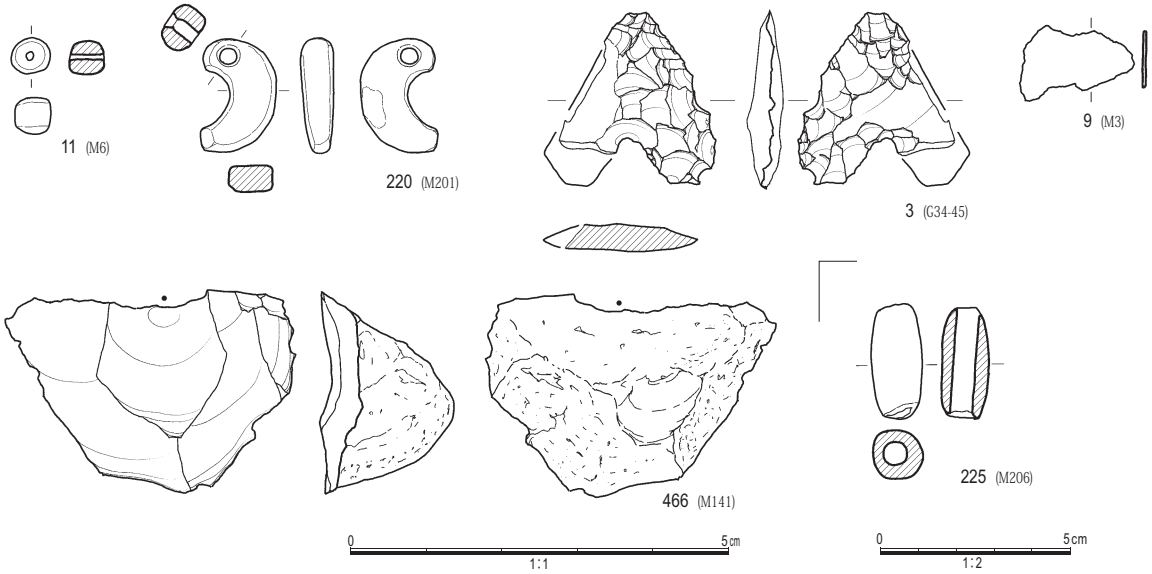


図43　出土遺物 (4)　1:1, 1:2

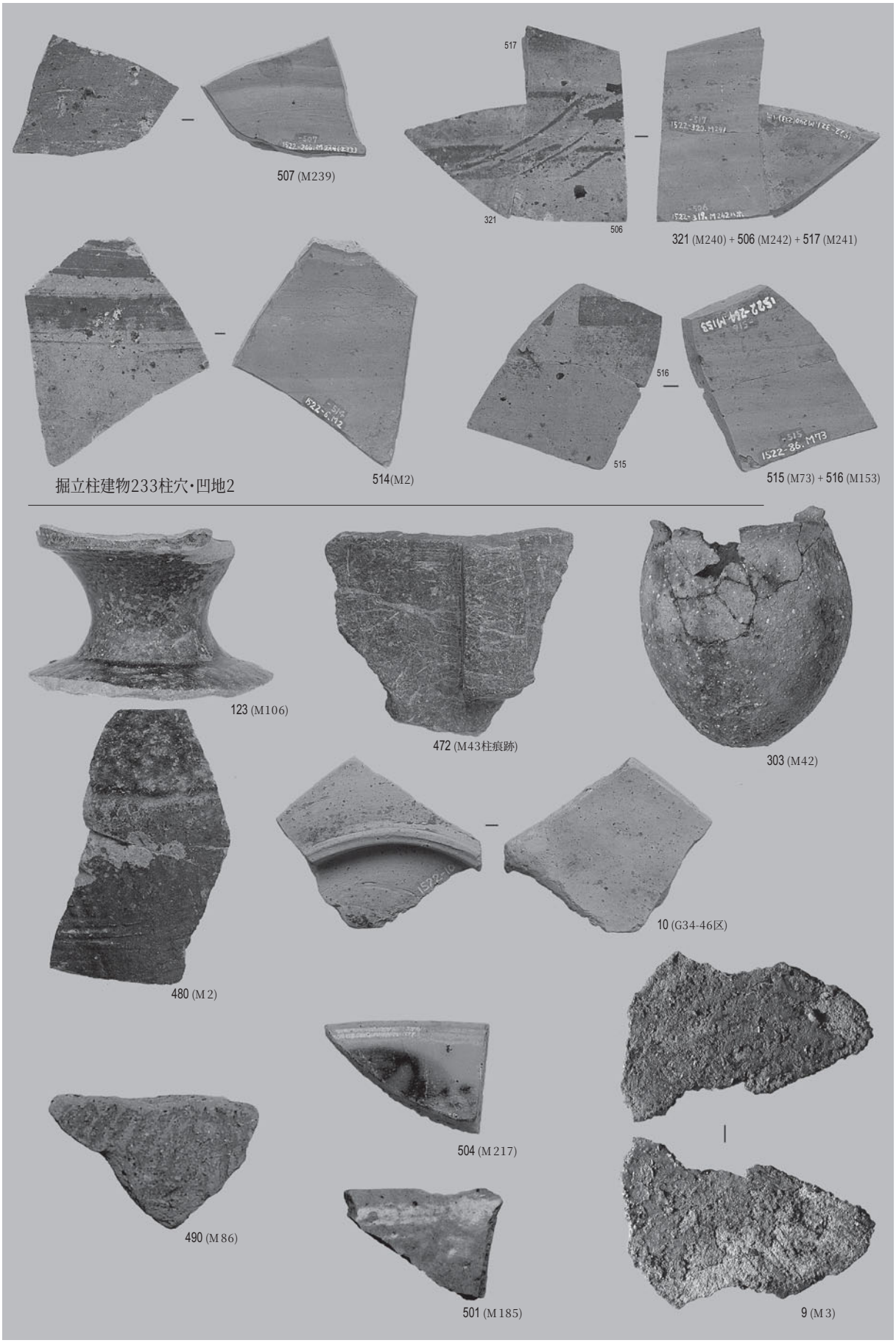

507 (M239)
517
321
506
321 (M240) + 506 (M242) + 517 (M241)
516
515
514(M2)
515 (M73) + 516 (M153)
掘立柱建物233柱穴・凹地2
123 (M106)
472 (M43柱痕跡)
303 (M42)
10 (G34-46区)
480 (M 2)
504 (M 217)
490 (M 86)
501 (M 185)
9 (M 3)

図44　出土遺物 (5)

3 おわりに

野方３次調査は、野方平原遺跡で実施した最初の本発掘調査である。

野方平原遺跡は、早良平野の西縁丘陵末端に発達する中位段丘上に立地し、古代官道が推定される峠道を見下ろす地点に位置している。野方平原３次調査地は東方へ突出する段丘面が成す緩斜面の中程に当り、北側を西へ深く入る谷に沿った段丘崖近くに位置する。この段丘面は全体にわたり段状の改変を加えられており、そのことが遺跡の保存にも影響を与えている。今回調査区でも確認したように、旧表土部は残らず、加えて段状の切り下げにより、その裾に近い区域の遺構は削平により消滅したものと思われる。今回調査は、そのような経緯の結果として、遺構の遺存する範囲 361㎡の調査となった。

調査により検出した遺構は、柱穴を主としたもので、各遺構から少量の遺物が出土した。以下、年代順に記す。

縄文時代の遺物が痕跡程度出土した。晩期の土器がある。

弥生時代の遺物は中期土器から認められるが、その時期とできる遺構はない。後期土器については、出土量が増える。土器を埋置したような柱穴もしくは小穴が点在する (M5・42・243 ほか) が、少数である。柱穴から構造物を復原することはできなかった。遺構 237 では、竪穴住居壁溝状の遺構 (M220) に落ち込んだような状態で後期弥生土器が出土しており、溝状部分 222 を別にして、これが弥生時代の遺構である可能性もある。

古墳時代遺物の出土は痕跡程度であった。後期遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。

奈良時代遺物は少量出土したが、遺構は確認できなかった。

平安時代とできる遺物一括資料も含んで出土した。土壙 4 のほか掘立柱建物 12・233・264 及び掘立柱建物とした 247 も、この時期の遺構と考えられる。

掘立柱建物 12 は 2 間× 2 間の構成である。その柱穴柱痕跡出土の石鍋を柱痕跡の空隙に落下したものと解釈すると、建物中央に位置して建物に伴う可能性が濃い土壙 4 から投棄状態で出土した土師器の年代から、建物には 9 世紀代をの年代を採ることができる。平行して建つ掘立柱建物 233 と 264 は、2 間× 3 間構造で南北棟の建物である。この 2 棟は南妻側の柱筋が通る位置にある。それはまた、建物 12 の北辺柱筋と一致し、前者 2 棟の南妻側の柱穴各 2 基が、後者の北辺柱穴のうちの 2 基と対応するような配置にあって重複し、建物 12 より前 2 者が新しい。

掘立柱建物 233 を構成する 10 基の柱穴のうち、6 基から同一個体とみられる陶器体部破片が各 1 点出土した。このなかに 2 組の接合資料がある。1 組は、西平側の連続する 3 基の柱穴から出土したものである。掘立柱建物 233 からの陶器出土状況は、明らかに意図的であり、出土部位の明らかな 2 点がいずれも柱穴掘方埋土中からというとからして、建物建築に際して埋置されたものと判断することができる。この陶器と同一個体と見られる資料が凹地 2 から 1 点出土し、凹地 2 から段落ち 1 を埋める包含層 (整地層か) も、建物 233 と時期的な関連を持っていた可能性がある。掘立柱建物 233・264 の時期について、出土遺物では明確にできないが、柱筋の重複等、建物 12 の規格を踏んで建築できるだけの時間幅の範囲にあったものと考えられる。建物 233 と建物 264 とは、同一構成で、平行した位置にあることから、同時に存在した可能性がある。掘立柱建物とする 247 は、上記 3 棟とは離れて、柱筋も別にする。出土遺物から 11 ～ 12 世紀以降が考えられる。

中世後期遺物は痕跡程度の出土があった。

時期を明らかにできないが、金銅製装飾部材断片と見られる資料が出土した。

遺構・遺物構成表(1)　表 1

遺構	遺物構成
1 段落ち	土師器(皿)、須恵器(蓋、甕)、弥生土器。陶器(壷)。平瓦、鉄釘、鉄滓。
2 不整な落ち	土師器、弥生土器、須恵器、陶器、鉄滓。
3 小穴	土師器(甕)、須恵器、弥生土器。陶器(甕)、鉄滓、金銅製品(装飾品断片か)。
4 土壙	土師器(碗、坏、皿)、須恵器(坏)、弥生土器。
5 小穴	弥生土器(高坏、器台、壷)。
6 柱穴	玉(ガラス小玉)。
7 土器埋置	土師器、肥前系陶器。
8 樹根抜き痕	弥生土器。
9 小穴	―
10 溝	土器(弥生土器か)、鉄滓。
11 柱穴	土器(弥生土器か)。
12 掘立柱建物	―
13 柱穴（M12構成遺構）	堀方、柱痕跡覆土から各小量の土器出土。いずれも詳細不明、弥生土器か。
14 小穴	弥生土器(器台)、須恵器(坏)。
15 小穴	土器(弥生土器か)。
16 柱穴	土器(弥生土器か)。
17 小穴	土器(土師器坏、弥生土器)。
18 小穴	土師器(坏)、黒色土器、須恵器(蓋)。
19 柱穴	土器(弥生土器か)、鉄滓。
20 不整な落ち	土器(土師器か)。
21 柱穴	土器(弥生土器か)。
22 炉（M247構成遺構）	弥生土器(甕)、石鍋。
23 柱穴	土器(弥生土器か)、鉄滓。
24 小穴	弥生土器(甕ほか)。
25 樹根抜き痕	土器(土師器・弥生土器か)。
26 柱穴	弥生土器(支脚ほか)。
27 不整な落ち	弥生土器(壷)ほか、砥石。
28 小穴	―
29 小穴	土器(弥生土器・土師器か)、須恵器。
30 小穴	―
31 小穴	土師器(さらか)、須恵器(甕)。
32 柱穴	須恵器(坏)、弥生土器。
33 不整な落ち	弥生土器。
34 小穴	弥生土器。
35 不整な落ち	弥生土器(把手部破片を含む)。
36 小穴	土器(内容不詳)、須恵器(坏)。
37 不整な落ち	石器類(凹石、磨石、敲石)。
38 柱穴	土器(弥生土器か)。
39 柱穴（M12構成遺構）	堀方：土師器、弥生土器(甕ほか)。 柱痕跡覆土：土器(弥生土器か)、剥片。
40 柱穴	堀方：土師器(坏か)、弥生土器。 柱痕跡：弥生土器(後期支脚)。
41 小穴	土器(後期弥生土器甕、ほか詳細不明破片)。
42 小穴	弥生土器(甕)ほか土器(弥生土器か)。
43 柱穴（M12構成遺構）	堀方：土師器、弥生土器(壷、器台ほか)。 柱痕跡：土師器、弥生土器、石鍋。
44 小穴	弥生土器、鉄滓。
45 柱穴	弥生土器(中期甕)ほか土器。
46 柱穴	土器(詳細不明)、鉄滓。
47 小穴	土師器(竈か)、弥生土器。
48 不整な落ち	土器(詳細不明)。
49 小穴	―
50 小穴	―
51 柱穴	土器(詳細不明)。
52 柱穴	土器(詳細不明)、須恵器(坏)。
53 柱穴（M12構成遺構）	堀方：土器(詳細不明)。 柱痕跡：弥生土器(甕)ほか土器。
54 柱穴	土器(土師器・弥生土器か)、鉄滓。
55 柱穴	須恵器(坏)。
56 小穴	土器(詳細不明)。
57 小穴	須恵器(壷・蓋)。
58 不整な落ち	―
59 柱穴（M233構成遺構）	土師器(坏)ほか土器。
60 柱穴	土師器(坏)ほか土器。
61 柱穴（M12構成遺構）	土器(詳細不明)。
62 樹根痕	土師器(坏)ほか。
63 小穴	―
64 小穴	弥生土器ほか。
65 柱穴（M12構成遺構）	堀方：土師器、弥生土器。 柱痕跡：土器(詳細不明)。
66 小穴	土師器、弥生土器。
67 小穴	土師器か(詳細不明)。
68 小穴	弥生土器か(詳細不明)。
69 小穴	土師器(坏・皿か)、弥生土器(大形器形)。
70 小穴	土器(詳細不明)。
71 小穴	土師器、須恵器(壷か)。
72 柱穴（M12構成遺構）	堀方：土器(弥生土器・土師器か、詳細不明)。 柱痕跡：土器(詳細不明)。 上部から、鉄滓。
73 柱穴（M233構成遺構）	土器(詳細不明)、須恵器(甕か)、陶器(甕か)。
74 不整な落ち	土器(詳細不明)。
75 小穴	土師器、弥生土器(後期甕)。
76 柱穴（M264構成遺構）	弥生土器か。
77 柱穴（M12構成遺構）	土師器、須恵器(坏)、弥生土器。
78 小穴	褐釉陶器(壷)。
79 小穴	土師器か。
80 小穴	土師器(碗)ほか。
81 小穴	土師器(皿か)。
82 小穴	弥生土器か。
83 柱穴	土器(詳細不明)。
84 柱穴（M233構成遺構）	土器(詳細不明)。
85 小穴	土師器か。
86 不整な落ち	土師器、弥生土器、陶質土器か(壷)。
87 小穴	土師器。
88 小穴	弥生土器か。
89 小穴	弥生土器か。
90 小穴	土師器(高台碗ほか)、越州窯系青磁(碗)。
91 小穴	弥生土器か。
92 小穴	弥生土器か。
93 小穴	土器(詳細不明)。
94 小穴	土師器、弥生土器。
95 小穴	土師器(坏)、弥生土器。
96 炉	土師器、弥生土器、須恵器(蓋)。
97 小穴	土師器(坏)、弥生土器。
98 樹根け痕	土師器、須恵器(瓶把手か)。
99 小穴	土師器(坏)、弥生土器。
100 小穴	土師器。
101 小穴	土師器、須恵器(壷か)。
102 小穴	土師器、須恵器(壷か)。

表 2　遺構・遺物構成表(1)

遺構	遺物構成
103 柱穴（M264構成遺構）	堀方：土器(土師器ほか詳細不明)、須恵器(甕：平行叩き目・同心円状当て具痕)、陶器(格子目叩き痕、内面同心円状当て具痕)。 柱痕跡：須恵器(摘付き蓋か)、鉄滓。
104 小穴	土器(土師器・弥生土器か)。
105 樹根痕	―
106 土壙	弥生土器(壷・鉢)、ほか土器(詳細不明)、陶器(壷)、鉄器(刀子)。
107 柱穴	土器(弥生土器・土師器か)、須恵器(坏)、鉄滓。
108 小穴	土器(詳細不明)、須恵器(瓶)。
109 小穴	土器(土師器、ほか詳細不明)、須恵器(甕)。
110 小穴	土器(土師器、ほか詳細不明)。
111 小穴	土器(弥生土器ほか)、鉄滓。
112 柱穴	土器(詳細不明)。
113 小穴	土師器、鉄滓。
114 柱穴	土器(土師器か)。
115 柱穴	土師器。
116 小穴	土器(詳細不明)。
117 樹根痕	土器(詳細不明)、須恵器、剥片。
118 小穴	瓦(平瓦)。
119 小穴（M264構成遺構）	土器(詳細不明)。
120 柱穴	土器(土師器か)。
121 小穴	須恵器(甕)。
122 小穴	土器(土師器、弥生土器)。
123 小穴	土器(詳細不明)、須恵器(坏)、鉄滓。
124 柱穴	土器。
125 柱穴	土器(弥生土器か)。
126 不整な落ち	須恵器(蓋)。
127 柱穴（M266構成遺構）	弥生土器か。
128 小穴	土器(詳細不明)。
129 柱穴	土器。
130 小穴	土器(弥生土器か)。
131 不整な落ち	土師器(坏)、ほか土器(詳細不明)、剥片。
132 小穴	土師器、鉄滓。
133 小穴	土器(土師器か)。
134 柱穴	土器。
135 小穴	土器(詳細不明)。
136 柱穴（M264構成遺構）	堀方：土器(弥生土器か)。 柱痕跡：土器(詳細不明)。
137 土壙	土器(土師器ほか)、鉄滓。
138 土壙	土器(弥生土器か)。
139 不整な落ち	弥生土器、土師器(坏ほか)、須恵器。
140 不整な落ち	弥生土器(甕)、土師器、剥片。
141 小穴	土器(弥生土器、土師器)、剥片。
142 小穴	土器(弥生土器か)。
143 小穴	土器(弥生土器、土師器)、瓦。
144 小穴	―
145 柱穴	柱痕跡：土器(土師器ほか)。
146 小穴	土器(弥生土器か)。
147 樹根痕	土師器、弥生土器、須恵器(甕か)。
148 小穴	土器(弥生土器ほか)。
149 小穴	土器(詳細不明)、須恵器(坏・壷)。
150 柱穴	弥生土器(甕)。
151 土壙	須恵器(甕)、鉄滓。
152 土壙	土師器、染付。
153 柱穴（M233構成遺構）	柱痕跡：土器(詳細不明)。
154 撹乱	砥石。

遺構	遺物構成
155 小穴	土器(詳細不明)。
156 溝	弥生土器(小形手捏ね土器ほか)。
157 小穴（M247構成遺構）	土師器、弥生土器。
158 小穴（M247構成遺構）	土師器、弥生土器(終末期高坏か)。
159 小穴	土器(弥生土器ほか)。
160 小穴	土器(詳細不明)。
161 柱穴（M247構成遺構）	土器(土師器・弥生土器)、須恵器(坏か)、鉄滓。
162 土壙	土師器、土器(弥生土器か)。
163 小穴	土器(詳細不明)。
164 小穴	黒色土器。
165 土壙（M247構成遺構）	土器(土師器、弥生土器)、剥片類。
166 柱穴	土器。
167 小穴（M247構成遺構）	黒色土器(碗)か。
168 小穴	土器(弥生土器か)。
169 小穴	土器(弥生土器、ほか詳細不明)、須恵器。
170 小穴	
171 小穴	鉄滓。
172 小穴	
173 小穴	
174 柱穴	土器(弥生土器か)。
175 小穴	土器(詳細不明)。
176 樹根痕	土器(詳細不明)。
177 土壙	
178 小穴	
179 柱穴（M266構成遺構）	弥生後期土器(甕)、土器(詳細不明)、鉄滓。
180 小穴	土器(詳細不明)。
181 小穴	土師器(甕)、その他土器(詳細不明)。
182 小穴（M247構成遺構）	土器(弥生土器ほか)。
183 小穴	土器(詳細不明)。
184 小穴	土器(弥生土器ほか)。
185 小穴	土器(弥生土器ほか)、李朝陶磁器(輪花碗)。
186 小穴	須恵器(坏)。
187 柱穴（M266構成遺構）	土師器。
188 柱穴（M233構成遺構）	柱痕跡：土師器。
189 土壙	土器(詳細不明)、須恵器。
190 柱穴	土器(土師器、弥生土器)、須恵器(蓋)。
191 小穴	土器(土師器ほか)、鉄滓。
192 小穴	土器(弥生土器か)。
193 小穴	土師器(碗)、須恵器(壷)、鉄滓。
194 不整な落ち	土器(弥生土器ほか)、須恵器。
195 小穴	土器(弥生土器ほか)、須恵器。
196 不整な落ち(M247構成遺構)	―
197 小穴	土器(詳細不明)。
198 不整な落ち	―
199 小穴	弥生土器。
200 土壙	弥生土器(甕)。
201 小穴	土器(詳細不明)、石製勾玉。
202 樹根痕	土器(土師器・弥生土器か)。
203 小穴	
204 小穴	土器(弥生土器か)。
205 小穴	土器(詳細不明)。

遺構・遺物構成表(2)　表 3

遺構	遺物構成
206 小穴	土錘
207 小穴	土器(詳細不明)。
208 小穴	(自然遺物)
209 小穴	土器(詳細不明)。
210 小穴	土器(詳細不明)。
211 小穴	土器(詳細不明)、鉄滓。
212 小穴	土器(詳細不明)。
213 小穴	土器(弥生土器か)。
214 土壙	鉄滓。
215 小穴	土器(土師器ほか)、鉄滓。
216 小穴	土器(詳細不明)。
217 小穴	土器(詳細不明)、須恵器(坏)、明染付(皿)、鉄滓。
218 溝状の凹地	土器(土師器・弥生土器か)、須恵器(坏)、剥片類、鉄滓
219 小穴	土器(詳細不明)、鉄滓。
220 溝（M237構成遺構）	土器(詳細不明)。
221 小穴	土器(詳細不明)。
222 (竪穴住居)(M237構成遺構)	土器(土師器、弥生土器)、須恵器(甕)、剥片類。
223 小穴	土師器、弥生土器。
224 小穴	土師器、弥生土器、須恵器、鉄滓。
225 柱穴	土器(土師器・弥生土器か)。
226 小穴	―
227 小穴	土器(詳細不明)、鉄滓。
228 樹根痕	土器(土師器・弥生土器か)。
229 柱穴	土器(詳細不明)、須恵器(坏)。
230 小穴	土器(詳細不明)。
231 攪乱	土器(詳細不明)、鉄滓。
232 小穴	弥生土器か。
233 掘立柱建物	―
234 柱穴（M233構成遺構）	柱痕跡:鉄滓。
235 柱穴（M264構成遺構）	堀方:土器(土師器ほか)、須恵器、鉄滓。 柱痕跡:土器、陶器(壷か)、鉄滓。
236 柱穴（M264構成遺構）	堀方:土師器。 柱痕跡:土師器。
238 柱穴（M233構成遺構）	堀方:弥生土器。
239 柱穴（M233構成遺構）	土器(詳細不明)、陶器(壷)。
240 柱穴（M233構成遺構）	堀方:陶器(壷か)。 柱痕跡:弥生土器。
241 柱穴（M233構成遺構）	須恵器(壷)。
242 柱穴（M233構成遺構）	堀方:弥生土器、陶器(壷か)。
243 小穴	弥生土器(壷・台付甕)。
244 柱穴	―
245 柱穴	土器(弥生土器ほか)。
247 掘立柱建物	―
248 柱穴（M264構成遺構）	土器(詳細不明)。
249 柱穴	土器(詳細不明)。
250 柱穴（M264構成遺構）	弥生土器(後期壷か)、土器(土師器か)。
251 柱穴	土師器(碗)。
252 柱穴（M264構成遺構）	土器(土師器か)。
253 小穴	土器(弥生土器ほか)。
254 柱穴（M264構成遺構）	土器(詳細不明)。
255 土壙	弥生土器(甕)、ほか土器。
256 柱穴	弥生土器。

遺構	遺物構成
257 小穴	土器(弥生土器ほか)、須恵器(壷)。
258 小穴	須恵器(甕)。
259 小穴	土器(詳細不明)。
260 柱穴（M266構成遺構）	土器(詳細不明)、、須恵器(碗)。
261 柱穴	土器(土師器坏ほか)。
262 小穴	土器(詳細不明)、鉄滓。
263 小穴	弥生土器。
264 掘立柱建物	―
265 試掘溝	土器(詳細不明)。
266 柱列	
267 柱穴（M266構成遺構）	
256 柱穴	
257	
258	
259	
260 柱穴（M266構成遺構）	
261 柱穴	
262 小穴	
263 小穴	
264 掘立柱建物	
265 試掘溝	
266 柱列	
267 柱穴（M266構成遺構）	

報告遺物観察表について

本表は、今回報告遺物の個々について記述する。

(表 4 ～ 7)

遺物は、報告掲載図毎に、遺物番号順に掲載した。項目は以下の通りである。

1) 図　　報告図番号
2) 遺物番号　　登録遺物番号とする。
3) 遺物記述　　表の分量が限定されたので、記述項目を別項目とせず、以下の項目について、順に記述した。項目は、「〔 〕」で示した。
   a. 分類　　種別、器種、細分の順に表記。
   b. 時期
   c. 出土位置　　調査区、遺構、出土層、出土区画(先述した調査区画)
   d. 材質(胎土・焼成)　　胎土は断面観察を行った。焼成については遺存環境に依ることが大きいため、特別な例以外は記述していない。色調は必要に応じて断面も記述した。石器類等は素材についても記述した。
   e. 成形・調整　　製作技術上の観察を記した。
   f. 特記　　項目立てした以外の事項について記した。
   g. 遺存状況　　遺存する分量、部位のほか、器表の状態について記した。続けて、計測を行ったものについては、その計測部位と精度、計測値を記した。

別に、遺物番号順の図索引を付した(表 8)。

表４　報告遺物観察表(1)

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
9	**401**	鉄製品 鉄釘	M1 北半	〔材質(胎土・焼成)〕材質：鉄／〔成形・調整〕断面不整な方形状、端部は丸み(錆により不詳)。〔遺存状況〕部分(片側を欠く)、錆により形状の詳細不明。〔計測値〕長(現状)2.2cm、幅0.8cm、厚0.3cm
9	**447**	須恵器 甕	M1 南半	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：やや粒状性あり、粗砂を少量含む。器表：灰色〔10YR 4/1〕。／〔成形・調整〕体部に叩き目調整(深い格子目)、内面には同心円状の当て具痕。口縁部の内外面周回する撫で調整。〔遺存状況〕上半部1/4周の破片。〔計測値〕口縁部径(復原)20.6cm
9	**456**	須恵器 蓋　平安	M1 南半	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：やや粒状性あり、粗砂を少量含む。器表：灰色〔10Y 6/1〕。／〔成形・調整〕頂部1/3篦削り調整。以下の外面から内面に周回する撫で調整。／〔遺存状況〕口縁部小破片〔計測値〕口縁部径(復原)13.4cm
9	**457**	瓦 平瓦	M1 北半	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂～細砂を含む。器表：現状で浅黄橙色〔10YR 8/3〕。／〔成形・調整〕凹面剥落して不詳、凸面縄目叩き目調整。〔遺存状況〕細片、全体に荒れ顕著、凹面の大部分剥落。〔計測値〕厚2.7cm
9	**470**	石器/利器 石包丁	M1 南半	〔材質(胎土・焼成)〕石材：輝緑凝灰岩／〔成形・調整〕背に平行する2孔を穿つ。穿孔は両面から。両刃。〔遺存状況〕中央部の破片〔計測値〕幅(現状)3.7cm、縦4.6cm、厚0.7cm
9	**477**	土師器 高台皿 平安	M1 南半	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、砂礫を少量含む。器表は現状浅黄橙色〔10YR 8/4〕。／〔成形・調整〕高台貼り付け、器表は遺存せず調整の詳細不明。〔遺存状況〕底部破片、器表全面剥落、器形の詳細不明。〔計測値〕口縁部径(復原)13.6cm、高台径(復原)6.8cm、器高(現状)2.1cm
9	**478**	褐釉陶器 壷	M1 北半	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：粒状性あり、粗砂を含む。断面灰色〔5YR 5/2〕。器表：内外面に施釉、釉は薄く、発泡して不透明、鈍い樹脂状光沢を呈す。内面では発泡して泡状。施釉部の器表は灰黄褐色〔10YR 4/2〕。／〔成形・調整〕内外面に周回する撫で調整。〔遺存状況〕口縁部細片
9	**479**	土師器 甑か	M2	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。器表：にぶい黄橙色〔10YR 6/3〕。／〔成形・調整〕外面：斜め方向の刷毛目調整、内面口縁をやや下った位置から縦方向の篦削り調整。〔遺存状況〕口縁部細片、器表やや荒れ、端部磨滅。
9	**480**	陶器 壷	M2	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：粒状性顕著、断面(露胎部)灰色。外面に施釉、釉は薄く不透明、にぶい樹脂状光沢を呈す。施釉部の器表はにぶい赤褐色〔5YR 6/4〕。肩部以上はやや厚みがあり、斑状に灰オリーブ色〔5Y 4/3〕を呈す(自然釉か)。／〔成形・調整〕肩部以上の内面に周回する撫で調整。肩部以下の体部は叩き目調整(平行叩き目)、内面に同心円状の当て具痕。〔遺存状況〕体部細片〔計測値〕口縁部径(復原)8cm、胴部径(復原)14.5cm、0.3cm
9	**123**	陶器 壷	M106	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：粒状性あり、粗砂を含む(粗砂は円磨されているように見える)。断面、露胎部褐灰色〔10YR 6/1〕。口縁部内面～外面に施釉。釉は薄く不透明(胎土中の鉄分が反応したものか)、器表は暗赤褐色〔5YR 3/2〕。口縁部内面、肩部にやや厚く、頸部の片側には掛からない。斑状に自然釉とみられる変化、樹脂状光沢をもち、灰オリーブ色〔5Y 4/2〕を呈す。／〔成形・調整〕頸部～肩部内面に指押さえ痕→外面～口縁部内面に周回する撫で調整。肩部で体部と接合(R480との接合部に一致)、体部〔計測値〕口縁部径(復原)8cm、胴部径(復原)14.5cm
9	**402**	鉄器 刀子か	M106	〔材質(胎土・焼成)〕材質：鉄。／〔成形・調整〕大部分は茎部か。〔遺存状況〕前半部を欠く。錆により形状の詳細不明。〔計測値〕長(現状)3.9cm、身幅(現状)1cm、背幅(原状)0.4cm
9	**493**	弥生土器 壷　弥生/後期	M106	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。器表：現状で浅黄橙色〔10YR 8/4〕。／〔成形・調整〕器表荒れて詳細不詳、内外面とも撫で調整か。〔遺存状況〕底部1/4周の破片、器表著しく荒れて剥落。〔計測値〕底部径7.5cm
9	**494**	弥生土器 鉢　弥生/後期	M106	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。器表：にぶい橙色〔7.5YR 7/4〕。／〔成形・調整〕外面：荒れて調整不明、内面：周回方向の刷毛目調整、工具痕が放射状に残る。底部一段突出。〔遺存状況〕底部、器表著しく荒れ。〔計測値〕底部径4.2cm
12	**472**	石器/器具 石鍋 11世紀代	M43 柱痕跡	〔材質(胎土・焼成)〕石材：滑石／〔成形・調整〕外面、周回方向の篦削り調整により成形、縦方向の把手を削り残す。内面：研磨により平滑。／〔遺存状況〕上部小破片〔計測値〕口縁部径(復原)22.1cm
12	**489**	須恵器 碗　平安初	M77 柱穴掘方	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：粒状性あり、粗砂を含む。器表：暗灰色。／〔整形・調整〕高台貼り付け。内外面とも撫で調整。〔遺存状況〕底部細片
28	**69**	土師器 坏　9世紀代	M4	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂・褐色粗粒を含む。器表、現況で橙色〔7.5YR 7/6〕。／〔成形・調整〕器表荒れて詳細不明、体部内外面・内底面に周回する撫で調整。〔遺存状況〕1/2周を欠く。器表著しく荒れて剥落。〔計測値〕口縁部径(復原)13.1cm、高台径5.3cm、器高4cm
28	**73**	土師器 皿　10世紀か	M4	〔材質(胎土・焼成)〕胎土：緻密、粗砂を含む。断面層状を呈す。器表：現況で橙色〔7.5YR 7/6〕。／〔成形・調整〕高台貼り付け。器表の剥落により詳細不明。〔遺存状況〕口縁部を欠く。器表層状に剥落して形状の詳細不明。〔計測値〕高台径7.2cm

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
28	**448**	土師器 碗　9世紀前半	M4	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を含む。 器表:現況で浅黄橙色〔10YR 8/4〕。／ 〔成形・調整〕高台貼り付け。器表剥落して調整の詳細不明。〔遺存状況〕底部、器表剥落著しく形状の詳細不明。〔計測値〕高台径8.8cm
28	**481**	須恵器 坏　9世紀前半	M4	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密。 器表:灰色。／ 〔成形・調整〕高台貼り付け。〔遺存状況〕底部細片
28	**483**	土師器 坏	M4	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を少量含む。 器表:現況で橙色〔7.5YR 7/6〕。／ 〔成形・調整〕遺存不良で詳細不明。〔遺存状況〕小破片、器表著しく剥落して器形の詳細不明。〔計測値〕底部径(復原)7.1cm
36	**311**	弥生土器 器台 弥生/後期	M5	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:強い粒状性あり(細砂を多量に含む)、粗砂～細礫を顕著に含む(角閃石が稀に混じる)。 器表暗赤褐色〔5YR 5/8〕。／ 〔整形・調整〕外面に斜方向の粗目の刷毛目調整。内面中央部に強い指頭撫で調整、下半部に斜方向の粗目の刷毛目調整。〔遺存状況〕下部を欠く、器表荒れて剥落。〔計測値〕受部径(復原)12.9cm
36	**312**	弥生土器 器台 弥生/後期	M5	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密だが、粗砂～細礫を顕著に含む、断面団粒状。器表にぶい黄橙色〔10YR 6/4〕。／ 〔成形・調整〕外面:受部やや下った位置から縦方向の粗目の刷毛目調整。受部の内外面撫で調整。内面の中央部細かな凹凸が顕著で、指押さえ痕か、まばらに指頭による強い撫で調整痕(縦)。下部に粗目斜方向の刷毛目調整。〔遺存状況〕1/4周の破片、縦に分割したような状態で、器表荒れ顕著で剥落。〔計測値〕受部径(復原)14.4cm、器高20.1cm
36	**313**	弥生土器 器台 弥生/後期	M5	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、粗砂～細砂を顕著に含む(稀に角閃石が混じる)。 器表:現況で赤褐色〔2.5YR 4/3〕。／ 〔成形・調整〕上下部は荒れて調整の詳細不明。中央部の内外面に斜方向粗目の刷毛目調整。内面の全体は平滑で、撫で調整によるものか。〔遺存状況〕上下部の大部分を欠く、器表荒れて粒状に剥落。〔計測値〕受部径(復原)11.9cm、裾部径(復原)13.7cm、器高17.5cm
36	**484**	弥生土器 壷　弥生/中期	M5	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂・褐色粗粒を含む。 器表:現況で橙色〔5YR 6/8〕。／ 〔成形・調整〕器表に化粧掛か、薄層が残る部分あり。器表の大部分剥落して調整の詳細不明。〔遺存状況〕口縁部細片、器表全面剥落。
40	**29**	弥生土器 壷　弥生/後期	M27	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を顕著に含む。 器表:現状で灰白色〔10YR 8/1〕。／ 〔成形・調整〕胴部最大径部に突帯貼り付け、刻み目を施すが、詳細不明。胴部の内外面剥落して調整不詳。〔遺存状況〕胴部細片、器表著しく荒れて剥落。
40	**62**	須恵器 坏　奈良	M55	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂を顕著に含む。断面では芯部にぶい赤褐色〔5YR 5/3〕。 器表:灰色〔N 5/〕。／ 〔成形・調整〕内外面周回方向の撫で調整。〔遺存状況〕底部1/4周の破片〔計測値〕高台径(復原)8.6cm
40	**269**	弥生土器 甕	M222 溝中	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、粗砂～細礫を顕著に含む。 器表:現状で、明赤褐色〔5YR 5/6〕。／ 〔成形・調整〕器表は暗くして、調整不明。〔遺存状況〕体部下部小破片、底面を欠く。器表著しく荒れて剥落(厚さ1㎜程度剥落か)。〔計測値〕底部径(復原)10.2cm
40	**303**	弥生土器 小形甕 弥生/後期	M42	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂～細礫を顕著に含む。 器表:半ば以上に染み状の付着物(黒斑か)、現況でにぶい黄褐色〔10YR 6/4〕。／ 〔成形・調整〕外面荒れて調整不詳、内面撫で調整。底部は僅かに球面を呈す。〔遺存状況〕口縁部を欠く。器表の荒れ著しく外面のすべて剥落。〔計測値〕口縁部径(復原)9cm、底部径3.5cm、器高11.6cm
40	**337**	弥生土器 壷	M243	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂～細礫を顕著に含む。 器表:現状でにぶい黄橙色〔10YR 7/4〕。／ 〔成形・調整〕頸部で上下部を接合、接合部内面に指押さえ痕、頸部以上も指押さえよる調整か、口縁部周辺は周回方向の撫で調整を加える。〔特記〕内部は、粒状の地山土(褐色粘土)で埋まるが、付き固めたように堅い。中には口縁部破片等が底部近くの位置に含まれている2015/12/3。／ 〔遺存状況〕細片化した1個体、1/2周程の破片か。器表著しく荒れ、一部を残し層状に剥落。。〔計測値〕口縁部径(復原)8.3cm
40	**450**	弥生土器 台付甕 弥生/後期	M243	〔材質(胎土・焼成)〕緻密、粗砂～細礫を顕著に含む。 器表:現況でにぶい黄橙色〔10YR 7/4〕。／ 〔成形・調整〕器表剥落して調整の詳細不明。／ 〔特記〕内部は、粒状の地山土(褐色粘土)で埋まるが、付き固めたように堅い。中には口縁部破片等が底部近くの位置に含まれている2015/12/3。／ 〔遺存状況〕底部、台部脱落。器表位置じる荒れて剥落。
40	**485**	須恵器 蓋　古墳/後期	M18 上部	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、疎砂を含む。断面灰色。 器表:にぶい赤褐色〔5YR 5/4〕。／ 〔成形・調整〕外面:頂部撫で調整、屈曲部の上辺回転篦削り調整、下位に凹線を施し量を形成、下半部周回方向の撫で調整。 内面周回方向の撫で調整。／ 〔遺存状況〕体部細片
40	**486**	土師器 碗	M31	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を少量含む。 器表:にぶい赤褐色〔5YR 5/4〕。／ 〔成形・調整〕内外面撫で調整。底部外周に沿って低い高台を削り出す(内側を一段低く整形)。〔遺存状況〕底部細片〔計測値〕裾部径(復原)9.3cm
40	**487**	須恵器 碗	M32	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、均質。 器表:灰白色〔10YR 7/1〕。／ 〔成形・調整〕内外面とも周回する撫で調整。〔遺存状況〕口縁部細片

表 6　報告遺物観察表(3)

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
40	**488**	弥生土器 把手付甕か　弥生/後期	M35	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 器表:現況でにぶい橙色〔7.5YR 3/2〕。／ 〔成形・調整〕体部に貼り付け。角状で、撫で調整による複数面で構成。〔遺存状況〕把手部、器表著しく荒れ。
40	**490**	陶質土器 壷	M86	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粉状、均質。／ 〔成形・調整〕外面:細めの叩き目調整、内面:当て具痕か、緩い凹面。〔遺存状況〕体部細片、器表やや荒れ。
40	**492**	須恵器	M98	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、器表灰白色／ 〔成形・調整〕手捏ね整形〔遺存状況〕把手部、下端部折れ、上端部接合面が残る。
40	**495**	土師器 坏	M131	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、少量の粗砂を含む。 器表:現状で灰白色〔5YR 8/1〕。／ 〔成形・調整〕高台貼り付け。内外面荒れて、調整の詳細不明。〔遺存状況〕底部小破片、器表著しく荒れて磨滅。〔計測値〕高台径(復原)10.1cm
40	**496**	弥生土器 手捏ね土器　弥生/後期	M156	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を顕著に含む。 器表:現状でにぶい黄褐色〔10YR 7/2〕。／ 〔成形・調整〕内外面に指押さえ痕。内面では密に分布。〔遺存状況〕口縁部を欠く、器表荒れて剥落。
40	**498**	弥生土器 甕　弥生/後期	M170	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を顕著に含む。 器表:現状で灰白色〔10YR 8/2〕。／ 〔成形・調整〕器表剥落して不明。〔遺存状況〕上半部、器表著しく荒れて剥落。細片化して接合できない。
40	**499**	夜臼式土器 深鉢	M181	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂を顕著に含み、細孔を多数生じる。 器表:凹凸が顕著で灰黄褐色〔10YR 8/2〕。／ 〔成形・調整〕内外面の器表不整で、両名に貝殻条痕文。〔遺存状況〕体部細片、器表荒れ。
40	**500**	弥生土器 甕　弥生/後期	M200	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 器表:現況で、明黄褐色〔10YR 7/6〕。／ 〔成形・調整〕器表は暗くして、調整不詳。底面は緩く球面状に突出。〔遺存状況〕底部細片、器表著しく荒れ。底部被熱か、赤化。〔計測値〕底部径(復原)7.6cm
40	**502**	須恵器 蓋　8世紀後半	M190	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、まれに粗砂を含む。 器表:灰色〔10Y 6/1〕。／ 〔成形・調整〕内外面に周回する撫で調整。焼け歪みにより、口縁部波状を呈す。〔遺存状況〕口縁部小破片、器表の遺存良。
40	**503**	土師器 碗　9世紀前半	M191	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、まれに粗砂を含む。 器表:橙色〔7.5YR 7/8〕。／ 〔成形・調整〕高台貼り付け。外面の高台直上箆削り調整、内面・内底面に撫で調整。〔特記〕土器埋置／ 〔遺存状況〕底部、器表荒れ。〔計測値〕高台径8.7cm
40	**508**	弥生土器 甕　弥生/後期	M255	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、粗砂～細礫を顕著に含む。 胎土にガラス状光沢をもつ板状の細粒を顕著に含む。 器表:現況で灰褐色〔7.5YR 4/2〕。／ 〔成形・調整〕器表剥落して、調整不明。〔遺存状況〕口縁部細片、器表著しく荒れて剥落。
40	**509**	弥生土器 甕　弥生/後期	M255	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性顕著、粗砂を少量含む　器表:現況でにぶい黄橙色〔10YR 7/4〕。／ 〔成形・調整〕器表剥落して調整の詳細不明。〔遺存状況〕口縁部小破片、器表著しく荒れて剥落。
40	**518**	弥生土器 高坏　弥生/終末期	M58	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂～細礫を顕著に含む。 器表:現状でにぶい黄橙色〔10YR 7/3〕。／ 〔成形・調整〕内外面とも荒れて調整不詳。〔遺存状況〕口縁部細片、器表著しく荒れて剥落。
41	**30**	石器/器具 砥石 板状/据砥石	M27	〔材質(胎土・焼成)〕石材:堆積岩(頁岩か)／ 〔成形・調整〕細長い長方形の板状。表裏面に砥面。図上表側の中央部には長軸に沿う船形の浅い窪み生成。裏面側は平坦面。片方の側面は自然面、他方の3/4は砥面、長軸方向に撓む。側面の砥面が古く、古い砥面の砥石は角柱状で、それを節理面に沿って分割して板状の砥石としたことも考えられる。。〔計測値〕長22.3cm、幅5.4cm、厚1.6cm
41	**31**	石器/器具 敲石	M27	〔材質(胎土・焼成)〕石材:砂岩(偏平な円礫)／ 〔成形・調整〕測縁部に敲打痕集中分布、剥離面生成。〔遺存状況〕片側欠〔計測値〕長(現状)10.5cm、幅
41	**40**	石器/鈍器 凹石	M37	〔材質(胎土・焼成)〕石材:砂岩(亜角礫)／ 〔成形・調整〕三角形板状の素材礫の表裏面に敲打痕分布。中央部は特に集中し、浅い凹面を形成。図上裏面にごく浅い凹面がある。〔遺存状況〕完存〔計測値〕長10.6cm、幅9cm、厚3.3cm
41	**41**	石器/鈍器 敲石か	M37	〔材質(胎土・焼成)〕石材:玄武岩(円礫)／ 〔成形・調整〕素材礫は長楕円形、断面は平坦部をもつ歪な楕円形。器表は平滑で、一端から剥離面が残されている。器表風化顕著で、使用の痕跡を確認できない。〔遺存状況〕完存、器表著しく風化。〔計測値〕長11.1cm、長径5.4cm、短径4.2cm
41	**42**	石器/鈍器 敲石	M37	〔材質(胎土・焼成)〕石材:砂岩(偏平な亜円礫)／ 〔成形・調整〕偏平礫の縁部が部分的に打ち潰し状となっている。〔遺存状況〕部分欠〔計測値〕長9.4cm、幅(現状)6.2cm、厚2.2cm
41	**135**	瓦 平瓦	M118	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を少量含む。断面団粒状。焼成堅緻。 器表:黄灰色〔20Y 6/1〕。／ 〔成形・調整〕凸面:縄目叩き目調整、砂粒付着。凹面:布目圧痕〔遺存状況〕細片、器表遺存良〔計測値〕厚2.3cm
41	**170**	石器/器具 砥石 板状　近現代か	M154	〔材質(胎土・焼成)〕石材:粘板岩か、節理面に沿って割り取った板状の割材を利用か。／ 〔成形・調整〕石材を切断整形する。端面と片方の側面に引ききった工具痕、側面の一部にバリ(切り残し)が残る。他方の側面は鑿状の工具(丸刃か)により長軸方向に断ち切られている。〔特記〕硯か。他に近世以降の瓦(取り上げない)。／ 〔遺存状況〕片側欠〔計測値〕長(現状)12.2cm、幅5.9cm、厚2cm

報告遺物観察表(4)　表 7

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
41	**501**	李朝陶磁器か 輪花碗	M185	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、均質。 器表:内外面に施釉、釉は発泡して半透明、にぶいガラス状光沢をもつ。施釉部の器表は灰黄色〔2.5Y 6/2〕。／ 〔成形・調整〕口唇部に輪花の切り込み、外面に縦方向の不整な凹線。〔遺存状況〕口縁部細片、器表の遺存良。
41	**504**	明染付 皿	M217	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:断面粒状、細孔を生じる。白に近い灰白色。器表:内外面に施釉、釉は発泡して透明、にぶいガラス状光沢を呈す。内面口唇部に1圏線、以下に文様(内容不詳)を描く。〔遺存状況〕口縁部細片
42	**2**	瓦 平瓦	表土G34-47	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂～細礫を少量含む。土師質、やや軟。器表:灰黄色〔2.5y 7/2〕。／ 〔成形・調整〕凹面に布目圧痕、凸面に砂粒付着、縄目叩き目調整。側面は篦削り調整、凹面側の稜線は面取り。〔遺存状況〕細片、器表の遺存良。
42	**10**	緑釉陶器 皿	G34-46	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を顕著に含む。断面:灰白色〔5YR 8/1〕。器表:全面に施釉、釉は薄く、緑色味あり透明、ガラス状光沢を呈す。／ 〔整形・調整〕内外面とも撫で調整。高台貼り付け右外面周回方向の撫で調整。／ 〔遺存状況〕底部、釉は取上げ後全面剥落。〔計測値〕高台径(復原)8.5cm
42	**445**	須恵器 坏	南東部表土G34	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、少量の粗砂を含む。 器表:灰色〔N 5/0〕。／ 〔成形・調整〕高台貼り付け。外面:周回方向の撫で調整→縦方向の撫で調整。内面:周回する撫で調整→内底面に接線方向の撫で調整。〔特記〕須恵器ほか／ 〔遺存状況〕小破片〔計測値〕口縁部径(復原)13.2cm、高台径(復原)9.1cm、器高4cm
42	**446**	須恵器 甕	調査面・表土層・採集	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、まれに粗砂～細礫を含む。 器表:灰色〔N 4/0〕。／ 〔成形・調整〕口縁部内外面に周回する撫で調整。体部外面に平行叩き目調整、対応する内面に同心円状の当て具痕。〔遺存状況〕口縁部小破片〔計測値〕口縁部径(復原)18.4cm
42	**510**	須恵器 蓋 8世紀前半	確認面凹部(表土2)	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:粒状性あり、均質でまれに粗砂を含む。 器表:灰色。／ 〔成形・調整〕内外面に周回する撫で調整→外(上)面に接線方向の撫で調整。〔遺存状況〕口縁部小破片〔計測値〕口縁部径(復原)13.1cm
42	**511**	須恵器 蓋 8世紀	南東部表土G34	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂～細砂を少量含む。断面芯部はにぶい赤褐色〔5YR 4/3〕。 器表:灰色〔N 5/0〕。／ 〔成形・調整〕摘み貼り付け→外面(頂部)に周回する撫で調整。内面:周回する撫で調整→中央部に接線方向の撫で調整。〔特記〕須恵器ほか／ 〔遺存状況〕頂部小破片
42	**512**	須恵器 碗 8世紀初	南東部表土G34	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を少量含む。 器表:灰色〔5Y 5/1〕。／ 〔成形・調整〕内外面に周回する撫で調整(回転は右回り)。〔特記〕須恵器ほか／ 〔遺存状況〕口縁部細片
42	**513**	土師器 甕	南東部表土G34	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:やや粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 器表:現状で、にぶい黄橙色〔10YR 6/4〕。／ 〔成形・調整〕口縁部～体部内面に撫で調整。体部外面に刷毛目調整(縦、痕跡的残る)、内面は周回方向の篦削り調整か。〔特記〕須恵器ほか／ 〔遺存状況〕口縁部細片、器表荒れ。
43	**3**	石器/利器 石鏃	遺構確認面G34-45	〔材質(胎土・焼成)〕石材:黒耀石(雲状斑)／ 〔成形・調整〕図上裏面の一部に素材主剥離面を残すほかは両面調整。〔特記〕黒曜石／ 〔遺存状況〕片側の2/3、脚の一方を欠く。〔計測値〕長(現状)2.3cm、幅(現状)2.1cm、厚0.4cm
43	**9**	金属器 金銅製飾	M3	〔材質(胎土・焼成)〕材質:金銅、両面に鍍金の痕跡、ごくうすい。／ 〔整形・調整〕薄く平坦な銅製板の両面に鍍金、破片のため、原形不明。片面に浮き彫り状の極僅な凸部あり(唐草文様か)。〔特記〕金銅製品／ 〔遺存状況〕破片、原形不明。脆弱なため、表面の清掃未了。〔計測値〕長(現状)1.5cm、幅(現状)1.0cm、厚0.05cm
43	**11**	玉 ガラス小玉	M6	〔材質(胎土・焼成)〕材質:ガラス、発泡顕著で、透明、つよい緑みの青色を呈す。／ 〔成形・調整〕全体の形状歪な樽形、孔の形状不整な楕円形状(つぶれたような状態)。〔特記〕ガラス小玉／ 〔遺存状況〕完存〔計測値〕高0.5cm、径0.49cm
43	**220**	玉類 勾玉	M201	〔材質(胎土・焼成)〕石材:不明(溶結凝灰岩か)、器表は、風化したような灰白色を呈す。／ 〔成形・調整〕全面平滑に研磨。図上の表裏面は平坦。〔遺存状況〕部分欠〔計測値〕長1.51cm、幅0.63cm、厚0.43cm
43	**225**	土製品 土錘 管状	M206	〔材質(胎土・焼成)〕胎土:緻密、粗砂を少量含む。 器表:灰黄色〔2.5Y 7/2〕。／ 〔成形・調整〕器表平滑。〔遺存状況〕両端欠〔計測値〕長(現状)2.9cm、径1.5cm、孔径0.6cm
43	**466**	石器製作残滓 石核	M141	〔材質(胎土・焼成)〕石材:玻璃質安山岩か(亜円礫)／ 〔成形・調整〕礫面を打面とする(単設打面)。打面転移なし。〔計測値〕高2.7cm、幅3.8cm、長1.7cm

報告遺物索引 (遺物番号順) 表 8

遺物番号	報告図	遺物番号	報告図	遺物番号	報告図	遺物番号	報告図	遺物番号	報告図	遺物番号	報告図	遺物番号	報告図
2	42	42	41	303	40	448	28	480	9	492	40	503	40
3	43	62	40	311	36	450	40	481	28	493	9	504	41
9	43	69	28	312	36	456	9	483	28	494	9	508	40
10	42	73	28	313	36	457	9	484	36	495	40	509	40
11	43	123	9	337	40	466	43	485	40	496	40	510	42
29	40	135	41	401	9	470	9	486	40	498	40	511	42
30	41	170	41	402	9	472	12	487	40	499	40	512	42
31	41	220	43	445	42	477	9	488	40	500	40	513	42
40	41	225	43	446	42	478	9	489	12	501	41	518	40
41	41	269	40	447	9	479	9	490	40	502	40		

報　告　書　抄　録

ふりがな	のかたひらばるいせき２
書　　名	野方平原遺跡２
副 書 名	野方平原遺跡第3次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1313
編著者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号　　TEL 092-711-4667
発行年月日	2017年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のかたひらばる 野方平原 (第３次)	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしく　のかた　ろくちょうめ 西区野方六丁目	40130	386	33 °33 ′37 ″	130 °18 ′29 ″	20150902 ～ 20151020	361	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野方平原遺跡	集落 散布地	弥生時代・古代	掘立柱建物	弥生土器、須恵器、 土師器、緑釉陶器、 金銅製品、石鍋	

要　約

遺跡は、早良平野の北西縁部、東へ延びる樹枝状の丘陵先端部に残る段丘上に立地する。調査地は、それの南端部に近い部位の中央に位置する。調査区は、3段の段状に残る現状地形のうち、中央の段に位置し、東へ緩く傾斜する平坦面となっていた。

遺構は、調査区の中央を中心に分布する柱穴が主なものである。調査区東辺に沿い、段落ちの痕跡と見える遺物包含層が薄く残る。柱穴の多くは地山土で埋め、明瞭に柱痕跡を残すものが多い。大形柱穴で2間×2間の古代の、2間×3間で2棟古代以降の掘立柱建物をそれぞれ復原できる。他にも大小の堀方の柱穴、深い柱穴が分布するが、弥生時代、古代のものが混在した状態となっており、建物等の復原には至らなかった。弥生時代の遺構では、溝と貼床状の土層で構成された遺構があり、竪穴住居であった可能性がある。

遺物は、遺構から小量ずつ出土したほかに、包含層からの出土があった。

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1313集

野方平原遺跡 2

－野方平原遺跡第3次調査報告－

2017年（平成29年）３月27日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　新交社
福岡県福岡市中央区地行１丁目11番３号